鉄虎堂電子拾遺　2

丸吉皆川家日誌　慶応四年・明治元年

佐藤大介　編・著

本書（ＰＤＦファイル）の利用にあたって

1、本書の著作権者は佐藤大介です。

2、本書に用いられている情報を利用する場合、書誌情報および掲載ＵＲＬの表示をお願いします。

また、本書の情報を再利用する場合には、機械的な解析処理等に用いる場合を除き、改変を認めないものとします。

商用利用についても認めないものとします。

3、本書の印刷・出版に関する諸権利は、編者に属します。本ＰＤＦファイルの組み版のまま、およびテキストデータを抽出して別途版下を作成し、印刷・頒布・出版することは認めません。

4、本書の内容を用いた学術、教育、文化活動などで成果物を出された場合、1部の提供をお願いいたします。

＊クリエイティブ・コモンズ・ライセンス　CC BY-NC-ND
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja

鉄虎堂電子拾遺　2
丸吉皆川家日誌　慶応四年・明治元年

発行日　二〇二〇年三月三一日
発行者　佐藤大介研究室
〒九八〇―八五七二
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉四六八―一
東北大学災害科学国際研究所　佐藤大介研究室
〇二二―七五二―二一四三
dsato@irides.tohoku.ac.jp
編著者　佐藤大介　青葉山古文書の会
制作所　蕃山房

＊本書は、文科省科研費・基盤研究（B）課題番号 19H01293
（研究代表者・佐藤大介）による成果の一部である。

鉄虎堂電子拾遺

丸吉皆川家日誌　慶応四年・明治元年　目次

本書の利用にあたって
凡例
慶応四年一月　8
慶応四年二月　21
慶応四年三月　34
慶応四年四月　35
慶応四年閏四月　48
慶応四年五月　59
慶応四年六月　72
慶応四年七月　87
慶応四年八月　102
明治元年九月　114
明治元年十月　123
明治元年十一月　135
明治元年十二月　153

丸吉皆川家日記　慶応四年・明治元年

凡例

一、この史料集は、磐井郡藤沢町（現岩手県一関市藤沢町）の商家・丸吉（まるきち）皆川家の代々の当主が記した、天明四年（一七八四）頃より明治五年（一八七二）までの日誌のうち、六代目当主・皆川喜平治が記した、慶応四年（明治元年・一八六八）一月から十二月の部分を翻刻したものに基づいている。

一、史料集には、現所蔵者の皆川龍一氏の了承の上で、当時の政治・社会・文化および環境などについて調査研究する上での参考となる記事を収録した。

一、漢字は原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名など、原史料の標記通りとした部分もある。

一、助詞として用いられている「与（と）」、「者（は）」、「江（え・へ）」、「而（て）」、「ニ而（にて）」「而已（のみ）」および「并（ならび）」は、原史料の表記のまま、活字を小さくした。

一、「ハ、（はば）」、「ツ、（ずつ）」、については原表記通りとした。
一、「〆」については、銭の単位や重さを示す場合には「貫」に改めた。
一、「ゟ（より）」、「「（こと）」などの合字については原則として現行の仮名に改めた。
一、本文には編著者が適宜読点「、」および並列点「・」を付した。
一、原史料中の欠字は一文字あけ、平出・台頭は原則として原史料の表記に従った。
一、史料の文中、文意の内容や人名・地名の比定などに関わる部分には、適宜その右側に（　）内で傍注を記した。
一、文意の通じない部分などには、その右側に（ママ）を付した。また難読や疑問が残る文字・表現については右側に「（ヵ）」とした。
一、原史料の破損により判読出来ない文字は、字数に応じて□□で示し、字数の不明な部分については［　］で示した。
一、原本で文章の抹消がある場合、抹消部分が読み取れる場合は、原則として抹消線の下に文字を示した。また、追記については原則として本文に挿入しているが、判別が困難な部分は原表記に従った場合もある。

一、史料中、現在の人権意識から見て不適当な語句が使用されている場合があるが、事実に基づく客観的な研究を進める史料として、そのまま掲載した。利用者にはその趣旨を理解されたい。

一、今回の「丸吉皆川家日誌」の翻刻は、青葉山古文書の会により行った。佐藤大介　鵜飼幸子　熊谷新一　志田清一　後藤三夫（順不同）

一、全体の構成・編集は、佐藤大介による。

慶応四辰年

正月元日晴曇り、寒シ、夜暮方小雪、古と違、元日ハ休ミ同様、礼廻り無之、二日より出掛廻る、二日日和、静なり、三日雨はれ、四日晴曇り、五日大ニ暖気、日和、六日風、此間夜ニ雨、至而暖気大、如春也、大ぬかり、無類之正月なり、一円不氷、晴而ハ風ニ成、未夕寒中也、年始礼もそぞろニ而、花々敷事無之候、緩々追々と成、七日より又寒く、八日大ニ寒気、暮方より雪、風、夜甚敷雪、嵐、寒気強く、雪ハ六・七寸、夜明方よりゆるみ、静ニ而、九日晴、日和ニ成而、雪大ニとけて、又風ニ成、

一伊達より油屋伝之助殿下着ス、八日なり、

然ニ、

江戸表又大騒動ニ付、糸買留申来る、

写左之通

一此度亦々江戸表大騒動ニ而、二の御丸ヲ薩州勢ニて廿三日夜焼払、

天璋院様盗出し、薩州屋敷へ入置候所、関東勢酒井左衛門様之手ニ而、廿五日火矢鉄炮を以、薩州屋敷江相掛、不残右屋敷焼払、打こわし、大合戦ニ相成、然所酒井軍勢日本無双之忠勇ヲ震ひ、終ニ天章院様ヲ取戻シ、其上薩州勢大敗軍、此度者関東勢莫太勝利御座候、併其後ハ如何之容子、一切相訳り不申候得共、何分ニも心配之世ノ中御座候由、廿六日江戸出発之飛脚を以申来候事、如此、

松平伊豆守様御出張ニ在

一伝作殿、大晦日ニ下り、三ケ日休ミ、四日五日より年始廻り之序ニ、糸買方手配、夫々と相談、取組見候所、去冬中なれハ弐百両ハ百八拾両ニ而も売払見切も可仕候所、越年致、皆所ニより借質入等被成、尤あら玉之正月ニ相成故、売気薄候成、尤損金之売物故、尺取不申、漸々弐駄位之高直段ハ品能キ所抜買故不安、弐百三拾両前後ニ而買入ニ相成、十日より気仙、清水川（志津川）江も手配遣候所、何方も当月末方ニも不成候而ハ、売気ニも不成、同様之所、十四日夜、御城下より早打之飛脚壱人、五ツ時頃下着ス、江戸より過ル十一日出、三日ふり仙府へ入着、十三日之暮方六ツ時出立、壱日一夜ニ而、今十四夜五ツ時

下着、江戸より四日振ニ而当着、誠ニ早飛脚也、然ニ右は当正月二日より候哉、
日付無之、

正月二日伏見より始、
京都・大坂之両所大変、放火ニ而焼払之仕懸、大騒動ニ相成候由、則跡ハ合
戦ニ可相成容子ニ付き、早々御注進仕候由申来ル、追々如何、
右ニ付、糸買方無用、早々取仕舞帰候様之飛脚也、依而清(キヨ)ツ川、気仙、其外
手配之故、夜通之飛脚遣候事、誠ニ以三ケ之津大変、大乱弥々起り、如何ニ
可相成、驚入□□□□、急之為知ニ而、委く無之、

一御国方ニ而ハ、御家督様□□□□□□□□□宇和島御同家伊達遠江守様より
御貰受ニ被為成候御事ニ而、当月十二日頃御出立、為御迎之、海上船ニ而三百
人被遣候由也、
一御手前様より被相登候御方々、上方・江戸表之騒動ニは逃隠候由、何れも世
上之噂さ、仙台方ハ評判不宜、扨々気之毒也、全体之所ハ、御前之思召無然、
御陣言申上候而も、御聞入不被為在、御役々様方御困り之由、京都之御受、

西国方之都合不宜方と申候、
屋形様御登之義、御延引と相成風、尤御嗣子様御整被相済候後ニ外御発駕難為成御容子也、全体西国方之含ニ者、南部・仙台ハ関東将軍家之方へ泥被居候物と評義相成容子、殊ニ　殿様ニも異国風ケン筒等為持、縫詰鉄炮等之支度ニ御人数御心懸被仰出候由之事等ニ而、如此、
一将軍様ニは官職被退、何方へ何様為成候哉、不聞得候、毛利様ニハ京江御登、禁裏守護之職被仰付度由被仰上候ニ付、勅許被為成候由噂さ有之、実事ハ何様、委く不知候、追々共ニ合戦、異国人御打払ニ可相成容子なり、
一御国御領内、去冬より諸上納方、在々金銀等不足ニ而、上納取都未ニ過半残り、先以非常之御取都、銭納之分、東山之分近弐千五六百両程相納候分陸送、日々〳〵出荷ニ成、道中甚敷駅場難渋、千厩町ニ而も、村方加馬願ニ而相出相勤候由、中道中指滞、未ニ余郡よりも御城下御蔵納ニ不相成、何程と申、際限無之故、駄送可仕様無之願等申上候由、彼是国方駅々騒キ不少、誠ニ乱此地ニも在之なり、
一西ノ方へ夜々異星有之、太白星と見へ候、少々隔ちて弐ツ有、上下と見、大ニ光り、又薄く成、見得隠れ近く成、遠く成、暮より五ツ頃迄ニ而隠れ、不

見得候なり、

一此間は寒暖殊ニ不同、十四日雪ふり、大ニ寒く、十五日同、寒気さら〳〵、小雪何分薄雪ニ而余慶不降候、寒ハあら〳〵可間ニ合也、昨今者殊ニ風強く、寒気也、十六日暁方より雪相応ニふり、四ツ過ニ晴而、又々風成、旧冬より寒く、度々小雪也、此間毎日雪風、十七日雪、朝晴風ニ成

一去冬京屋持御用金五千何百両、着入之節盗取れ候、金子此頃風与なけ込れ、改見候所、七百両程抜取、残金ヲ返し入候由、其者一円不知候得共、京屋ハ先以大慶此事ニ候やとか、　御上様共御大慶、

一会津様より仙府江、御加勢御頼之儀、御使者参り候ニ付、是又御吟味中之事、此義京へ御帰之上と御相拶在由也、

御奉行様方ハ　徳川将軍家江御泥ミ有之所、御一門様中ハ御泥ミ無之、不及加勢ニ之御談ニ而、未タ御決定無之候得共、　屋形様御始、御奉行様方大ニ御泥ミ、思召違なりと人々噂申事ニ候、会津様へ御加勢被遣候様ニ而ハ、京・西国方之敵と可相成事眼前之事ニ候、右之御容子ニ付、但木土佐様京ニ而騒

動之折逃去、仙台士ならは打留よと、声□而追れ候由、粗噂有之、坂英力様ハ江戸ニ而逃□□両人之□□未ニ行衛不知と相噂、無拠次第□□、何分勝れ、諸人より秀たる御奉行御出成相成不申候而ハ、納り不申、今天下分目、大切之場合ニ相成候事、御一門様方ニ而も、当分御若愚多なりと申候、勝れたる御人有之候へとも、御役ニ不被出候様子也、

正月十八日、昨夜雪、朝晴、当月は冬之様、度々薄雪ふり、寒も去冬よりさむし、十九日風、寒気也、廿日同、寒気不緩候、

京巻　写

十二月八日九ツ時、万石已上不残参内被仰出、主人在京無之候ハ、、留主居罷出、長・防寛大之御処置、大膳父子被免、入洛、官位如元之被仰出候段、一統江見込次第御尋在之、夜ニ入御評定、前文之訳被仰出、翌九日朝、薩・芸之兵卒、各二大斗、大炮数十挺引廻シ、九門内江入、六門御警衛、王政復古、幕府被相廃、門備攝籙被相止、堂上方摂政始御摂家・御華族共ニ、七人参内被相扣、其他種々被仰渡在之、晩ニ土州容堂参内ス、会津・桑名守護職・所

司代病気ニ付、御免願出、如願之相済、十日総裁・議定・参与之三職被相設旨被仰出、総裁ハ有栖川、議定者中山大納言、土御門大納言、正親町三条大納言、尾、越、芸、土、薩、外ニ山科宮、仁和寺宮十人、参与者大原宰相、万里小路、右大弁長谷三位、岩倉前中将、橋本少将、尾、芸、越、土、薩、五藩之臣各三人宛、都合廿人与被相定、会津、芸、因、蛤御門者備前并十津川郷士代り入、公家門前同警衛ハ土州代り入、御台所御門前京都見廻役ハ、松浦肥前守代り、其外境町、中立売御門、大内六門、内外共ニ薩、芸、土之三藩兵隊野陣仮番ニ而、日夜厳重ニ警固ス、加州者九日着、細川、備前ハ近日着之由、長、薩家老并人数着、市中之騒動不一方、堂上・地下之奥方立退等、日夜血散哭泣之声も間々相聞得、近衛殿といへ共、平公家ともに夫々御立退、十二日将軍より、此様之場合ニ付、家来下々之者、武者軽率之振舞より大事を引興シ、輦轂之下ヲ騒擾致候得者、奉恐入候ニ付、一先ツ大坂表江罷下候段御届、直様大坂江罷下、依之人気少く、安堵之形勢ニ相成候、

又江戸方、

十二月廿三日晩寅刻、二ノ丸より出火ニ而丸焼、即刻鎮火仕候、

同廿五日、薩州屋布（屋敷）公義より人数を以取巻、鉄炮大炮を以打合、双方怪我人在之由、市中大騒キ、御屋敷共焼払ニ相成、御門見付、端々迄之御固在之、此末何様可相成哉、不安事ニ御座候、乍然七ツ時頃ハ下火ニ相成事、右之通申来候間、為御知申上候、已上、

十二月廿九日　　嶋屋佐右衛門

右ハ第一番手前へ申来り候、

少々行違在之候　　跡分上方共ニ手前へ先ニ参候

又々正月十九日早飛脚到来ス

京大坂之事大合戦　写

正月三日大坂御城御発陣

将軍様御上洛先陣　　当世ノ軍ニハ騎馬ノ勢不用、皆歩軍也

馬不入、　鑓も少シ古と大違

酒井雅楽頭様　姫路

松平隠岐守様　　松山　備後ノ御老中也
松平肥後守様　　会津

右御勢三万余騎　御本陣上様、御旗本之勢、後陣者紀州様、御出勢之所、山崎天王山辺ニ而、中山勢土州、薩州、長州、右三家之人数相守、いツれ戦と□、細川様之勢も有之事と外注進ニ見得候、其外京御通之諸侯方、阿州、土州、ヒセン（肥前）大村、備前、烈敷取合ニ相成候由、勝敗者相分り不申候得共、誠ニ恐敷事ニ相成、又伏見、鳥羽、淀辺放火、近辺不残焼払ニ相成候事、尾州家之御付御家老成瀬隼人正様上坂被成、尾州大納言之首級を以、随従本領安堵願出候よし、御聞入不相成、但此文不分り、
尾州侯ハ京方ニ被為成候ニ付右之外

一尾州、越前、安芸、土佐、薩摩、長州、
右六家者一度外　此内尾州・越前御両方ハ将軍家不分りナリ、
関東御身方（味方）之諸侯方在之容子候得共、日本分め之騒動故、中々三五年ニ者静ひつ無覚速（覚束）相見得申候、右之騒動ニ而浜（横浜）表も不景気、扨々困入、心痛無此上事ニ御座候

正月十日　　上野屋金七様　　同忠作

一御当家ニ而ハ、屋形様御上京之義御吟味、御一門様方御不同意ニ而御指扣ニ成、
先達伊予伊達遠江様より御貫請被遊候御家督様為御迎之船ニ而、三百人為御
登被成置候所、右之御方を以御名代ニ被遣候事ニ御吟味相成、御指替と成、
依而又々当過ル十四日船ニ而出航、五百五拾人先分より抜人ニ而為御登被遊候
由之事、
然ニ又会津より御加勢并ニ兵粮米三万石御無心之御使者来着被申出候よし相
聞候、
右旁何角と御用多大取込、
且又去冬為御登之但木様并坂英力様御事、京都・江戸御両人共ニ何様相成候
哉、未タ御注進無之義不分ニ而、節角御案し被成置候由也、
右英力様御事、二月初ニ御下着被成候由也、但木様ハ近江御知行所ニ御止
宿之由
一十九日之早飛脚、廿日出立為登候所ニ、又々廿日暮後五ツ上刻早飛脚来着、
当時手前ニ糸買方客人滞留ニ付、三ケ度め之早也、福島より十八日出ニ而、
一今日当着、然ニ上方大合戦ニ相成、長州方勝利ニ成而、関東方会津勢殊大敗軍、
大坂町中不残焼払、御城者落城と相成、　上様并会津様　松平中国之越中様　板倉

福しまの御本家様　四頭火船ニ而江戸表へ過ル十三日御帰府之由、左候得者長州勢江戸迄も追懸可申抔と人々申事ニ御座候、右ニ付御府内大混雑之趣申参候間、弥々糸之買方一切〳〵御無用也、片時早く切上、御帰り可被下候、以上、

正月十八日出、当地迄三日振也、廿日着、今朝出立登帰候、廿一日上日和此間者雪もふり不申候得共、寒気者相応也、去冬之余寒追々ニ成而長引候

一廿三日日和、廿一日御地頭様方より御触ニ而、

一銭相場金壱歩ニ代弐貫文通用

一改正手形壱枚代五百文也

当百文ハ百文と也

一百文札者　百廿五文也

右之通通用可仕由御触なり

御城下表ハ過ル十三日御触相成候由、当百銭ハ去秋八拾文之割御触ニ候所、小セん下直ニ成候ニ付、此度ハ百文と成、江戸表他国共銭弐之通用ハ去年より、御国者遅く御触在、併御郡御触未ニ無之候事、

小売銭商ひハ又□□可被成也、

一御地頭様ニも、若旦那御登被為蒙仰候ニ付、御家中より四人御召連、御供被仰付候由也、依村町江抜々御貸上被仰付候事、

未夕御請之者不聞候　是も御見合被成、

右御登りハ止ニ成、会津御征伐之御人数ニ替ル、

一上方合戦、長州方播州姫路之酒井雅楽守様御城落城相成、次ニ紀州若山（和歌山）も責落し、又江州膳所之御城、浜之城勢州桑名御城松平越中守様御持城共ニ四ケ所之城々、西国方ニ責落され候由、徳川将軍之家ひし〳〵と敗軍、尤京表者、将軍様方懸り之御方者、皆前ニ印候通被相除候事ニ而、長州様江守護職被仰付候故ニ、今ニ而ハ将軍家天子へ朝敵と相成候由之書付相唱候、

西国勢者、追々東海道近辺之城々相落、関東へ責下り可申容子ニ付、町家見世店戸ヲ指、取片付、立退計りニ支度致候由、右ニ付、仙府ニ而も大ニ騒ケ敷容子、

大殿様御発駕御見合ニ相成候由なり、

又国分氏之便ニ而申来候由、委ハ本文ニ、徳川公は朝敵ト相成詔勅ニ奉申上候有之候て、仁和寺宮共ニ、日月之錦之御幡ヒル返し而、徳川御征討との御

事ニ相成候、此節江戸方彦根之御城へ押寄られ候由ナリ

一廿八日上日和、小月廿九日大ニ暖気、雨ニ成、小雨なり、

一御手前江、会津より加勢等御無心来候、御使者滞留中、又最上上ノ山よりも御加勢御無心来る候所ニ、徳川家大敗軍、江戸江御下着之由相聞得候ニ付、会津之御使者涙ヲ流し、御□事無之内早々出立帰り候由、上ノ山江ハ先□候哉、弐百人程御貸被遣候様御都合相成候哉、三組之内へ被仰付候由風聞有之候、止ニ相成哉、

徳川公朝敵と被為成候ニ付、官軍御発向ニ而ハ、御手前様ニ而も徳川家へ御加勢者為成間敷候事も、何様御評議相成候哉、不知事也、此義何方へも不被遣、被相止候由也、

二月朔日雨気ニ而曇り、夜弐三寸之雪、三日風、寒気、四日同、

一奥郡一統銭相庭之事ニ而、納御勘定難立窺、被相達未不分、御郡方弐貫文之御触出無之候、

一近年御渡塩御引進ニ而、一統迷惑指痛候所、今年ハ御金入ニ付、早ク御渡り之御首尾合、先月廿八日頃より今明之内御渡り相成由、結構也、
当村二日御渡

一大豆ハ、去冬より高く引上、当時七貫五百文八貫文ニ上ル、

一米者、存之外不安下、問屋五斗七貫文、内証小手六升余迄、

一魚類ハ不漁、弥々高し、

一銭相庭、先日御内より御触ニ而、弐貫文取引相成候得共、御郡方御触無之、又御城下表一応御触在之候所、願等出、御吟味替り色々混雑、弐貫文ハ止候由ふれ合、困候、

一四日、初午也、此間ハ又如冬寒気差返し、

一当村ニも、諸上納方ニ而又混さつ相出候、銭者七五ニ而御取立相成候間、右并石物直段高直之所、御郡相庭ニ而上納被成置度奉願候事也、

四日之夜、気仙沼辺八・九寸之雪、六日ハ此辺雨、大雨終日ふる、七日上日和、八日雪、あれ候成、

一屋形様御事、御発足之御心懸被遊候所、此頃坂英力様并大内様御遊歴御帰り、追々上方容子被仰上候ニ付、御吟味、御登ハ被相止、御見合ニ成、御隣国無心之義御断ニ成、江戸御屋敷・在郷初、惣御道具船ニ而一ウ御下シ被成置、大凡千駄程相成候由、一宇被取払被成、　将軍家より御手前へ、日光山口御堅め御頼被仰遣候所、御返事御受不被成置候由也、全体ハ御先祖様先年厚ク御世話被為成御情合を以、当　屋形様深ク御泥ミ被遊、御一門様方御吟味御面倒被成置候所、此節ニ相成而ハ、徳川家朝敵との訳ニ而、京表一宇御切替、西国方守護と成、尚又御所官人方も御替りニ成、依之屋形様、御名代大條孫三郎様被召出、直々御上京蒙仰せらる由、此御方ハ当時御撰ミナリ、此節御奉行兼候御方九人と申候、近江江但木様御迎七十人為御登被成置よしの事、

一尾張様并越前ノ福井様共、将軍徳川家之御一家重立御旁とニ候得共、此度京都方と被為成候様相見得候事、　当分合戦ハ御休相成候由、

一但木土佐様為御迎之、七十人程ニ而御登り、伊勢へ着船之所、伊セ路も騒ケ敷候ニ付、又乗戻、江戸江上り、御下屋敷ニ滞留之由なり、

上方騒キ時々之便書難尽候、

一駅場継立之御定、諸賃銭之義、先達而割増之御触、一統六双倍五割との事ニ付、五分と五割との違不分ニ而、伺ニ相成候由也、何レニ六双倍余之賃ニ而、並駄賃銭より増ニ成、町々は商人之荷より諸士方之人馬継立ヲ望而、大ニ宜、脇往還是迄ハ至而少セんニ候所、此割増ニ而ハ、一統取目能、百文之所ハ六百五拾文と相成候、

二月八日銭相庭御郡方より御触出成□、壱貫六百文者御取立諸上納方御相庭、小前諸商人通用ハ弐貫文、取引時相場ニ可仕候事、押付ニ相成候、

石ノ巻鋳銭ニ而沢山ニ出ル、尤鉄大セんなり、依而下直ニ成、他国共ニ去年より弐貫文通用也、御国ハ遅く相成候間、他領より却而入銭相成□、御城下拾人衆より願上、弐貫ニ成、鋳セん□□□薪売者無之、銭計りニ而困、仍鋳セんも止ニ可相成容子ニ申候事、

同八日雪ふり、大嵐ニ而大ニ寒気、未タ正月之節、去冬暖気の残寒也、九日き
く日、晴れニ相成候、昨日ハ終日雪相応ニふる、
今日ハとけニ成

一米相場も、存之外不下候、尤銭下直ニ相成候間、銭売物ハ弥々高直ニ成、
一手拭者、四百文ニ相聞得候、
一糸綿、改正札ニ而廿五日、却而高し、
代直し五百文也

二月十日、終日雨ふり、暖気、

一追々所々より来ル上方巻、難書尽、仍而抜書写　御役付新ニ
三職
総裁有栖川卿宮　此御方ハ親王様御家也
議定仁和寺宮　山階宮
中山前大納言　正親町条前大納言　中御門中納言
尾州大納言　越前宰相　安芸少将　薩摩少将　土佐前中将

参与
大原宰相　万里小路右大弁宰相　長谷三位　橋本少将
岩倉前中将　尾藩三人　越藩三人　芸藩三人　土藩同　薩藩同

一太政官始、追々可為興候間、其旨可心得居候事、

一朝廷礼式、追々御改正可被在候得共、先摂御録門流之義被延候事、

一近年物価格別騰貴、如何共すへからさる勢ひ、富者ハ益富を累ね、貧き者益窮兎ニ至り、畢竟政令不正より不致、民ハ王者の基たる事、御一新之折柄、帝被悩宸襟候、智謀識救弊之策有之候ハヽ、無誰彼可被申出候事、

藩士参与之名面

尾州
荒川甚作　丹田惇太郎　田中邦之助

越前
中根雪江　酒井十之進　毛受庄之助

薩州
岩下佐膳　西郷吉之助　大久保市蔵

芸州

土(辻)　将曹　桜井与四郎　窪田平治

土佐
後藤象次郎　福岡藤治　神山九兵衛

追々被命参与　熊本
溝口孤雲　津田山三郎

柳川　大坂　美濃
十時摂津　小原仁兵衛　大垣
家老
号鉄心

〆

外ニ

風説書

一兵庫開港之一件者、大樹公奏聞無余儀次第在之、無拠当三月御差許ニ相成、尤諸藩被為召、見込等御聞之上者、諸家之建言品々在之、十二月七日より交易御免之事、

一大坂及富家共百廿余軒江交易被仰渡候事
兵庫
廿弐軒御請ニ成候処、九月中■御役者之□□□兵庫ニ一夜ニ仕着場取立荷廿六ノ内弐人首切、右場所へ獄門ニ掛、交易之物成敗抔と申大札ヲ立候、仍残

百人余御請不仕候、

一将軍家ニ而ハ、松前之地異国江御売被置候由之噂なりと申候、外色々在、

一此頃京都より、奥州并出羽大名計□□征伐致候様ニとの勅命、仙府へ来着、会津若松公ヲ、仙台一手ヲ以征伐可在之との仰御到来之由、猶追々上方御勢御下向之御趣被仰渡由也、

一上方より来ル写書之内ニ、　将軍家へ被仰渡ニハ、先年和宮御姫御降嫁被為在、其後将軍薨去、且　先帝攘夷成功之叡願より被為許候処、始終奸吏之作諜ニ出、御無詮之上ハ、旁一日も早御還京被促度、近日御迎公卿被指遣候間、其旨相心得居候事　御姫君ヲ可返スとの御事ニ相見得候事也、

一江戸より申来ル書ニハ、将軍様ニ而異国人御頼、長州江何国人、土佐へ何国人、薩摩江何国人と軍勢御指向、合戦之手配被為成、江戸江京より禁帝守護し奉候御吟味ニ而、御城中大急御普請被成置候由也、　仙台様江ハ日光御固メ被相頼候由相見得候、色々申事也、

一生糸・綿、ほツ〳〵と買人相下り、少々ツ、買入、弐百四・五十両、六拾両位迄、手前客人滞留、気仙ニ而六固程買入、昨十三日帰り来ル、

十二日より二月之節ニ相成候暦之表也、当月ニ相成寒、十一日・十二日・十三日、昼夜雪、風、十二日ハ大嵐、十三日中風、十四日昨夜より今日雪、寒、

十三日市不盛、人不立候、誠ニ市日ハすたり候事也、

一米者少々引上之方、五升五合

一大豆八貫文、小麦同し

一肴類殊之外高、然し売る者妙也、

中の

一かれい大壱枚ニ而五百文

一塩鰹壱本　壱貫弐三百文

一干するめ　一連五百文

一あさり　小壱升弐百文

一柴のり拾枚壱状弐百文

一赤魚壱本ニ　〆五百文
たなこ弐枚
一中たら壱本壱〆三百文
〆
肴不漁ニ而、浜々難儀之由也、

二月十七日、日和之訳ニ候得共、此間者十五日ニも毎日小雪、十四日雪ハ五六寸之雪也、寒気相応ニ而曇り勝、去冬緩々敷故ニ、追々寒気長く成候、

一駅場賃銭御割増之割、六双倍・五割之間不訳りニ而、御郡々より伺相達候ニ付、
（欠字）御上ニ而も江戸表へ御取合ニ相成候ニ付、其間中は元百文之所、七百五拾文ニ而継立請取候様、役前筆代拾文取納候様被仰渡候、右ニ付御諸士方往来継立至而不足ニ成、町場ハ大ニ宜相成候事、并駄賃より高く相成候也、
一手前客油屋、生糸七箇ニ而十四日登せ、伝作御客両人并平治同道ニ而十七日登候、外買人も少々ツ、買人登候、残糸も在之候、世の中騒ケ敷故、はら〳〵買入不申候、惣休、此辺ハ少々残ル、品宜分抜候、余村余郡残り、

二月廿一日昨夕より今日雨ふり、廿五日晴□□漸々少暖気ニ成、

一御当家様御一手を以、会津若松松平肥後守様御征伐可仕旨　御勅定被為在候ニ付、御家中方へ「　　」

……〔この間、数行分破損〕……

一御■「　　」御事「　　」

此度会津御征伐被為蒙候由、拙者義も御□□罷出度候間、何之御用ニ而も御家中同様御用□被仰付度由被仰越候ニ付、其段早々御取受之上、京都江も早々御達被成置候由也、

二月廿四日日和、日かん入口、廿五日上日和、併春寒難去、日中ハ暖ニ而、朝夕殊之外寒気、さら〳〵雪花有、廿六日至而寒風在、廿七日日かん中日也、社日晦日、

一御城下表、此節近国十八頭御大名様、并出羽之御方共ニ、仙府へ追々御使者を以被仰越、御出入多く、町中も大ニ取込、

御手前様、会津御征伐、并ニ奥羽両国之大小名徳川家征伐之義被　仰渡候ニ付、御籏頭之事ニ付、諸事御随順之義共ニ御取合被為在候事ニ候哉と、推察御取合之事、何レ之義一円分り不申候事也、当分上方大條様迄御註進、尚御下向ヲ御待候様子、会津様ニハ上方戦ニ而重立侍ひ打死、其外雑兵共ニ一万人も失ひ、此節戦之力落ニ成、迚も仙台へ御相手不及候御吟味ニ而、御手前へ御降参ニ而、最初両度ハ兵糧等御無心、其後ハ何卒御征伐之義被相免、半地指上候而も、是迄之通相続罷在候様御取計奉願候由、両三度御使者被遣候由、殊ニ又江戸一ツ橋将様よりも御使者御下之由、屋形様并御一統御迷惑、何分京都より　御籏并大條様御下り、御容子次第、御和談ニも万一可相成歟、難計、

当時江戸同様、粗々御使者御出入、

御出陣之御同勢、大割、

一先陣者片倉小十郎様

但此先ニ第二番鮎貝志摩様

御物見ヲ兼
夫より段々
一屋形様御直御出陣被遊候由
右御役割御出陣之節替候跡へ在、
一後陣茂庭様、御旧例之通、
一伊達筑前様御事ハ、伊達御境
大木戸御堅メ、其外所々御割合在之、
御備御出陣之番組、未タ不知、追々、

一手前平治糸間違有、先日登仙致、廿六日夜下着ニ而相咄候、
正月より商売相成、御城下入之分、生糸荷百余箇、御城下拾人衆手配、并他
国分共ニ一宇御指留、当分御上ニ而御借受之由ニ被仰渡、直々駄送、船ニ而海
上為御積登、塩釜出御積入ニ相成候由、商人中大ニ当惑之仕合、如何様ニも
可致様無之、困り居候由也、仍町家共ニ商人中大ゐニ騒ヶ敷事也、
此義至而御非常之事也、

国々之御使者ハ、国分町宿屋中御出、会所ハ外陣屋ニ［　　］［　　］
［　　］ニ［　　］御［　　］様［　　］御出
［　　］（以下、破損）

……〔この間、落丁あり〕……

三拾弐□仙表江上府致候様御首尾成而、毎日之往来［　　］大名様方御上
下御出入、弥々取込、右御宿所ハ寺々江被仰付□、
京方御宿札左之御三方也

奥羽鎮撫総督本陣
奥羽鎮撫副督本陣
奥羽鎮撫参謀本陣

右之御方、御退屈御凌、大ノ原（台原）ニ而火術并煉笛抔御覧ニ入候由也、
三月
過ル廿七日ニハ、会津御発向之先陣、伊達筑前様并大條様、御両方千余人ツ、、
弐千余人之御行列御覧ニ而、尤花々敷御形そく（行束）、上方之御方も御賞美被成候
由也、

右之外追々毎日之様御出立、　屋形様ニハ七日御発駕と御日取成由、少御延引成、

一町々の御制札御書替ニ付、当町も四月朔日古札ハ御取上ニ成、御諸士之賃銭窺、此間ハ又違而、百文之所ハ三百文位之御割ニ成由也、

一仁和寺宮様者、摺河府中迄御下向在、御滞留之由、

一鮎貝兵庫様御事者、羽州庄内江御向へ被向候由也、是ニ訳柄有之御同勢千人位、追々承候ニ、又御指替ニ相成候共申、色々区々の説也、一体之御同勢者前後御替り在之

一山立猟師共江も、戦場御召遣ニ付、御首尾先達而ニ被仰渡、当村八人之内壱人、昨日御割付ニ而、仲間償金五拾切を以頼、二日出立為登候所、又々三日ニ跡御割付被仰渡、大ゐニ御判持共当惑致候由也、

一山伏衆中者、宗法頭より去年より被仰付、兵法も稽古致、御備ニ成候なり、

一村々江御人足御割付参候由、軍場諸色持運ひ方ニ而も御用ひニ可相成候、

一此節人々近年軍咄不絶事ニ而、小供迄咄合居候処、先日会津御出陣前、石ノ巻海道の矢元（矢本）町辺、手習小供寄合、大勢門弟弐・三ヶ所人数集り、弐手ニ分チ、西方ハ会津、東方ハ仙台と成、両方へ陣屋ヲ懸、戦場間数見合、大将成者年

十五・六才、夫より下也、然ニ相図（合図）を以戦を始、大ニ打合、互ニ争ひ、仙台方押立られ敗走す、西方勝ニ乗而、追打之所ニ、やふかけより□勢起り立、さん〳〵ニ追まくり、其内ニ先一両人抜かりして、西方陣屋へ火をかけ、焼□□成而大騒キ、会津方の敗軍と成、仙台□大勝□、

右之火事ニ而、町方近所大ニ騒動スなり、其侭ニも不成、入寺へ候由、大笑ひ、但小供之軍法　珍敷と為ス、

……〔この間、落丁あり〕……

四月五日、朝昨日より寒く、大霜も下る、仍又寒く成、六日曇り、七日曇り、

今七日　屋形様御出陣被遊候ニ付、郡村一統朝精進致、神社江参、御勝利被為成候様可奉祈上候段御触相廻、参詣致候事、

当御家中之御方々茂、御供登旗ニ而、昨夕竹駒宮江夜籠り参詣有、右延引ニ成、

一南部様ニも、仙台へ御加勢御人数被進候由也、

此度御征伐之義ニ付而ハ、色々様々之事有之由、風唱人々日々々々咄合有之、

書印難候也、

一今七日又来る写左ニ、

須賀川より為知之嶋屋左右衛門殿より三月廿九日出之状

一当月廿六日夜、水戸御家来千人余白川着相成、尚又会津御人数今夜長沼今泉迄五千人余泊り、明日白川江御乗込ニ相成候趣、同所市中大騒動ニ御座候、此後如何成行可申哉難計、早々為御知申上候と申事也、

仍而ハ、御手前先陣丁度の御出合ニ、無程合戦ニ可相成候、存之外大合戦ニ可相成哉、

四月八日朝雨ふり、尤南暖気候所、昼四ツ時より晴、曇り、風ニ成、又寒シ、九日朝大霜ニ而至而寒し、此節桑ほき立候由、例年より当年ハ早く萌立、霜ニ当り候哉と存られ候、

一此間者、浜方漁事在、肴類も、先達中より参候処、八日市かれい壱連五百五十より五百文位ニ成り、追々安く成、

一銭相庭之義ハ、大ニ崩れ、相手次第下落ス、此節御用金上納ニ、銭ニ而ハ難成、金納也、諸才覚手配致候而茂、金不調ニ而、稀ニ銭を金ニ替、弐貫五百文位より三貫文壱歩位之取行ニ成、東西南北、右之通気仙沼辺三貫弐百文迄、南方ニも此直段相聞得候、上納之御首尾厳敷、何分金ニハ御領内一統困り候由、依而

米直段ハ不及申、大豆・麦等迄大ニ引下候、此辺壱斗ニ而も買人無之、

大ツも此節六貫位と落る、都之品為金無之、銭と金ニ而大違也、店々見世商ひ一円と申様無之候、成程御地頭様諸士方并　御用金者大分、右御軍用ニ而被召上、国中之金さつはり、札共ニ立払ニ可相成、尤未ニ御上金共ニ上納ハ三・四分通残り居可申容子也、

米も大分御入用ニ可相成容子也、

軍之事、絵本ニ而計り見居候処、近年西国より上方、此節奥州ニ始り、此節先陣ハ伊達桑折迄ニ而合戦ニ成由申来り候、恐しき事と成［　　］、段々三百年来之乱ニなり、

一末治事佐沼町へ今日九日

……（この間、落丁あり）……

百弐三拾人も在之候哉、守護之御方夥く光りかゝやき、御同勢壱万七千人と申候、過ル廿六日より引も不切、道中先々支而御延引也、

又十二日ハ、京方御勅使九條様并御三方也、同戦場江御出駕被遊、同錦ノ御簾者日の丸ニ候由也、由用金銀ニ而縫付御立候也、矢張御馬也、

御附の士三百余人、外御手前様より五・六百人御添、何様一千人程御同勢ニ而御簾抔ハ日ニ詠候而光耀き、誠ニ尊とき御簾也、

右両日之御発駕、御行粧者諸人目を驚ス、誠以御見事成拝見物也、一体之惣人数大凡七万人程と之御人数と相咄候、

外又南部様御事者、御加勢之訳ニ而、今日頃仙府御入着之由、外様御大名様も御加勢、先立ニ而被為在候哉、何分御城下も諸方へ残之御大家御諸士御城下廻

リ御堅め相成、
御城内御留主居ハ弥々一ノ関様也大将ニ而
又屋形様御先成
御一門様之内其外御役々
右之通リ御出陣被為成候而茂、　御城下之取込、御他領御諸士共々御出入旁、
江戸同様夥シ、
南部様御同勢三千五百人ニ而段々御登、毎日御家中御通、仙府へ引続、仙府之
前後道中不引切、仙台勢共ニ宿屋付、旅籠代ハ壱人前三百文ツ、御払被相渡、
余リハ野陣也、
近国之御大名様方、仙府へ御荷物札、仙台江登荷と言御書付也、西南ノ御方ニ而、
右之通、
一此度被召上候処之是迄之御領地、并ニ其外共ニ、伊達・信夫又ハ出羽之内等
都合高弐拾八万八千石、当時　御手前様御預リ地と為成候由相聞得候、
一此節ニ相成候而ハ、御人数も余慶ニ成候間、相戻候様御指図ニ而御城下へ被指
置候、外ハ家元へ被相戻候由、又不参人ハ残リ多しと申候、

一十九日日和、四月之節ニ入、此間天気続、風多シ、

今日当所組抜衆中、御出入司御支配之分三人、本家共ニ登仙出立ス、御郡奉行様御支配未タ御日指無之候、併組抜ハ常々宜と申而、右ニ成候処、此節何もイヤ成事と大ゐニ後悔ス、尤大ニ金入用ニ成、手前ハ其頃大ニ被進候得共、組抜ニ不相成、依而此節ハ軍場江御召被遣候事も無之、一方之安心也、乍併如斯乱世、軍と相成候而ハ、百姓前茂事多く、諸人足此年ハ御用金も三方四方より御無心、御用甚困り、難渋致候事也、追々段々百姓前難義ニ及候時節ニ成、

一過ル十九日より廿日・廿一日大ゐニ暖気強く、仍而俄草木蒔立、蚕も十四五日頃よりむへ出、蒔立の桑霜焼ニ而難義ス、昨今又次蚕むへる、今廿一日朝より曇リ、暑くし而、昼より雨ふりと□、此頃引続無雨、照込、桑麦ハ雨を待所也、幸ひの上雨也、四月ノ中暦表廿九日也、蚕ハ些々早シ、俄暑サニたまされ、見当より早くむへる、

廿一日之夜相応雨、廿二日朝迄晴而曇リ、東風之気ニ而冷々敷、此雨ニ而麦苗代・桑、都而万物宜、今年麦相応之作合ニ見へ候、

一当月始頃、気仙高田町酒屋一軒焼失、又無程不遠出火、一宇焼失痛入候、大焼也、

一江戸表之事、此程ハ痛入タル在様也と申候、表戸明置候家無之相見へ候、人ハ何様、屋守抔計り居候風、暗闇同様也、

御征伐之上方勢四方御堅め、往来安々難成、東海・東山両道より御下向、仁和寺宮様御大将ニ而、御両方両国薩・長、其外軍勢ニ而、然ニ、徳川家之一橋卿、私義段々申上候、通行へ不宜、右之仕合ニ御座候間、敵対不仕候、何様之罪科被仰付候共、御恨ミ無御座候段品々申上られ候由ニ付、軍のはつみ無之、仍而一橋卿水戸様之方へ当時御預リニと被為成由也、御城者尾張様江御預りニ成由、右之次第ニ而、江戸ハ早く片付候ニ付、先達会津へ御人数分ニ而被相向、併仙台様持切ニ付、口々御堅のミ、会津へハ不入、御扣之由也、

過ル十七日、水沢伊達将監様京より御下リニ而、当御陣所岩沼御在陣九條様江直々御着、入京より之御勅宣被仰上候故　屋形様白石御城御在陣へ大急被仰遣候

ニ付　御前様夜通ニ岩沼御陣所へ御入被遊　御三方御引合御吟味之上、会津御征伐ヲ被相宥、米沢上杉公之方御征伐可被成との之御事と御吟味有之由、全体先達上杉方へ御指図ニ而、会津城責先陣可致被仰遣候所ニ、無其義、殊ニ又以前御国之御セ話ニ相成候米沢百姓共、此節仙台御陣所へ凡弐千人程罷越、申出候ニハ、会津方へ合体致され、裏切、御敵対可仕心掛ニ相聞得申候、依而御註進申上候間、御打入ニも御座候ハ、、以前之御恩報し上度、御案内可申上候段申出候ニ付、御吟味ニ成由、伊達将監様此度之御首尾都合宜と唱ひ、又但木様・三好様御両人ハ御不首尾ニ而、御咎メ在之由、此節色々唱ひ多日々也、南部より先日より毎日小荷駄馬廿疋三十疋と申様、仙府江兵粮并諸荷物駄送、馬ハ則軍用ニ成仕かけなり、夥く入来候、

全体会津様之御心懸ハ、仙台公御発向ニ候ハ、降伏シ而、戦ひ等ニ不及、何ニも成へし、余国之仁責来候ハ、、成丈働、相死ニ可致との御究也と申候、

右之覚悟ニ相聞得候ニ付、他国御大名勢ハ会津之御領江不入、只道々口々御扣、堅計也、仙台之軍勢、此節会津近く湯原ニ先陣ハ、御滞陣ニ而、此方より之御指図ヲ待居られ候由、彼ノ方参候者、昨日此地へ帰リ候者相咄候由承リ申候、

四月廿四日日和ニ成、昨日ハ風寒し、曇リ勝、此節蚕所々大ニむへる、此間之霜ニ而桑少々痛候

一近年軍装速（装束）ハ、古と違、鎧、甲ハ不用、陳笠（陣笠）ニ縫詰、鉄炮と唱候、着込クサリ入、又ハから金銭・文セン縫付、中形抔ノ如く真綿入、上ハ羽二重ニ而仕立、其上着ハ半切着用ニ而、陣羽折ハ様々、仙台印ニ黒の五分と云唐切ニ而、廻リニ付ル月印一統也、右之品仙府店々売切、外より買集、物々片ヨリニ而売候由也、

一御城下ハ、米直段ハ金歩ニ六升位、此節大入込ニ付、引上候由なり、在々ハ安し、御城下ハ肴類も高直なりと申候、

一軍之風、古と違而、弓と鎗ハ不足ニし而、刃付（ケン）之鉄炮多ク持、御行列ニ御士ひ方多く歩ニ而、名々手鎗ニ而御出陣也、去年異国船二艘ニ而拾万両とヤラ御先手面々

買入、御用ひ、是等ニ而別而御金入也、

廿六日雨ニ成、廿七日雨、百五の霜ハ雨ニ成
百五日也

去年より当年之御金入者、誠ニ山の如し、此頃異国人四・五人仙府へ来ル、依而　御上より御指図ニ而、佐藤助五郎様并斎藤徳兵衛、御両人御取扱ノ御役人被相付候所、御上へ金四万両御用金御座候間、右之金子御渡被下候ハヽ、跡拾万両も御用立上候様と申相談ニ候所、御上ニ而ハ跡金借用不致、手切ニ成候様可仕との御事ニ御指図相成候よしなり、船之代金御渡残リニも候哉と申候、程無出立帰る、

一廿六日より不晴続ニ而、昼夜雨相応也、廿九日漸々と晴ニ成、日和宜、桑切ニ成一統迷惑ス、始之雨廿一日より不天気、

一会津征伐、弥和談ニ不成、御人数御操出シ、四月十九日午刻より未ノ刻迄戦争ス、右絵図面并御行列御人数押出の絵図面、御名付来る、写左ニ、

此　登米様付後陣ノ人山道ニ而先ニ廻リ
先陣ノ戦ひ瀬上主膳陣所山間也真田喜平太横合より炮発
此戦先ハ百人程痛、此方四人痛、陣屋別也
会津方螺ヲ吹、人数引揚ル、此方ニハ別条無之、敵方生死如何、未不知、其後則此方御用ニ付帰リ候、弥々御人数被相進、屋形様御事も、伊達郡へ御進発被遊候由、

一此度　屋形様御出陣被遊御行列

先陣

壱
伊達筑前殿
御供人数千五百人

弐
伊達弾正殿
同千弐百人

三
伊達藤五郎殿
同千三百五拾人

四番
伊達安芸殿
同弐千人

三澤信濃殿
同千五百人

伊達数馬殿
同千五百人

鮎貝太郎平殿

伊東相模殿

大番組六百五拾人
瀬ノ上主膳殿
同　五百人
兵粮奉行
松本知之進殿
同六百人
御目附弐拾人
上下千五百人
御武頭弐拾人
上下三千人
御前御備
片倉小十郎殿
御供弐千人
御前御供勢

大番組五百人
大松沢掃部介殿
同　五百人
御籏奉行
上遠野伊豆殿
同　百人
一刀流師範
櫻田慶助
門人弐百人
御陣奉行
真田喜平太
上下三百人
山崎源太左衛門
八百人

……〔この間、落丁あり〕……

御奉行

但木土佐殿　石田正親殿
同千六百人　同千弐百人

坂英力殿　大番組
同一千人　千三百人

三組一千人　御陣奉行
御簾元御足軽　泉田志摩殿
御小人合弐千五百人　同六百人

後殿　御両人　柴田外記殿
茂庭周防殿　同五百人
同弐千人

大番頭五人　山立猟師
同一千人　千五百人

御若老
中村宗三郎殿　兵糧奉行
松枝兵衛
葦名靱負殿　五百人
上下八百人　此御方当時出入司也

惣締御目付　　但諸方口々江御割付ニ成
四人
同弐百人
都合五万弐千八百人余
大筒五拾挺　小筒五百挺
鎗五千本　弓八百張
但古と違弓不足ニ而鉄炮多シ
冑甲（甲冑）不用美拵ひ之装速
外
京都方
大将軍御上方様
凡八百人

過ル十九日之戦合者、弥々御勝利ニ成由、追々御注進来ル由也、

一京都方、西国勢江御手前御人数御加へ、庄内鶴ケ岡酒井様方へ御発向ニ而、
是又戦合ニ成、是も敵方七・八十人怪我人、薩・長之内五・六人怪我人ニ成候由、

是又敵方引入、此方御勝ニ成候由、降参ニ成由也、
然ニ会津発向之内、山中七ヶ宿近辺ハ、町中売場濁酒壱盃弐百四五拾文、と
ふふ壱丁八拾文、但此辺之品より倍程大也、誠以大高直也、

閏四月五日、此間ハ所詮不天気、雨勝、今日ハ日和ニ成、風寒し、六日より八
専ニ成八日、迄照続、八日朝霜下る、但し桑ニも不当候、八日朝者至而寒し

一生糸残り不少在之、何程安く売と申候而も、買人無之候、清水川辺同、残り
三拾程も在□、南部鍵屋去年買入置候分廿八箇、囲ニ成而同所ニ在之、出荷
不成候、弐百五十両位ニ而も買人無之候、
御上より此節御借り上候も難計、買人無之、出荷も成兼、如此、

……〔この間、落丁あり〕……

十九日四ツ頃、宇都宮東平松と云所ニ而合戦ニ成、右ノ城下入口打合、下河原

大炮打懸、放火討合致、徳川勢日ノ丸ノ御籏数本相立、奥羽口ノ方へ懸リ候由、
何入口ノ方も放火、押合、官軍□□下ニノ丸書様不分 徳川勢弐三千人計り、城下
中遠巻ニ致居、夜五ツ時頃少々ツ、石井桑島ト申所へ之模様、戸田殿ハ何方へ
御立退御人数計り相残り候事、
右ハ宇都宮城主也

四月廿日

徳川家之臣家、諸方へ起り立、会津御征伐茂存之外大軍、籠城其外所々ニ在而
大乱也、右之容子ニ而ハ官軍敗軍ニ相見得候、併是等ハ小軍也、
然ニ御本家御嗣子様御事も、御城ニ而一夜御休ミ、翌日岩沼より白石迄御出馬
被遊候由也、然ニ先以御婚礼御済シ被遊候上、御出陣ニ成、
一西国細川様より御手前へ御加勢来ル由、噂サ在之実否聢と不知候、
一宇都宮辺合戦ハ海道筋之軍也、会津表之軍ハ、当二日より又合戦ニ成、是者
御当方勝軍之方と噂サ在之、御城ヲ遠巻相成由也、
一九日雨天ニ成、手前今日かり敷刈方へ成、此間ハ勝軍之祈り流行餅在之候、

十日雨、晴ニ成、

一宇都宮合戦書ニ官軍と在ハ、此度別而江戸より直々御下向之京方也、此方へ御加勢之為ニ御下りニ而、御打合被仰遣候所、御手前ニ而者御加勢御手伝被下候ニ及不申と御挨拶被成置候由也、

茶畑ノ与右衛門、一昨日帰宅、同人ハ御城下より軍場へ用向被相頼、会津御陣中へ罷越帰り候由、品々見聞し而相咄候、会津ノ御城、此方之勢ニ而遠巻ニ囲む、此節古風仕度ハ松山茂庭様并外御壱人日本風の御装束也、却而大ニ宜相見得候由也、相馬様も同様御支度、

一徳川家之勢ハ、江戸ハ上野凡千人程ニ而堅、日光山ハ壱万人程ニ而堅、一橋様ニハ此両所へ御隠被成候哉と申候、

当水戸様御事も、京方と成而、京へ御登被成候哉と噂申候由也、諸方末ニ片付不申哉、乱最中也、江戸より奥方之乱と成、当時上方・西国方ハ静謐也、

一米沢上杉様ニ者、此方へ御手訳ニ成、仍而会津口壱方之先陣、京大将様より五千

被仰付、御味方と成、

一南部御加勢五百人程御連立、此方より御壱人将頭立ニ而、会津へ被遣候由也、

其外南部勢ハ、御城下より古川辺道中ニ滞留、見合被居候由也、

一九條様へ御附添之士ひ、長州之家人、誠ニ白学（博学）多才の賢人壱人在之、諸事此仁指行、御手前之御陣方江□夫々と添心在之、能く万事を計ニ、仁物之義ハ□軽得、実事宜き人と諸人噂在□□、九條様御事も、誠ニ結構成御方なりと申候、仙台之御吟味□諸事御任コハミ等無之候由也、

……（この間、落丁あり欠損）……

今十日、向ノ清介旦方出立、先［　］り帰宅之上ニ而、今日ハ会津行之訳ニ而登り、本家様抔も金入用之事申下シ、節角之セ話御無心、扨々当惑、千万困り候事、御地□□ニ而も又々御用金、当所之組抜両人ハ、兵粮御奉行方へ召被遣候由、

一御嗣子様御事ハ、伊予ノ伊達遠江様御養子之訳ニ而、京公家様方御若君、御

壮年ニ諸国遊行被成候御方と相咄候也、此度御下りニも、乱世ノ折ニ而、御道中至而御少勢ニ而、大條様守護、岩城ノ平潟より船ニ而塩釜江御乗込、当月三日御城入被遊候由也、

御道中御忍ひ

一会津様御城遠巻戦ハ、口々備々日割を以合戦、二日之戦、大松沢様手強々押付、敵数人打、将名首七人討取、其外鉄炮廿七丁、火薬拾貫目、兵粮廿石程取、陣屋へ火ヲ付焼、全ク勝軍ニ而引揚ル由也、次ハ五日之戦と成由、段々口々日割の戦と成、火薬拾貫目取也、

一軍場より逃落候御士ひ、并在々猟師共逃帰り候者数人相聞へ候、長陣ニ而食事不自由、打抜飯ノ積りニ而、間ニ合兼候容子、御飯と味噌等計りニ而ハ困り、右之次第也、

一軍の次第、色々様々の■噂、不分り、存之外長御陣なり、如何之訳か、米沢上杉様御和□御扱在之由之事も在之候、

一蚕も、先立ハ鮒子ノ最中、不出高直、十五日前ハ百文ニ弐百目前後、夫より夫(ママ)より十六・七日追々買人も多進ミ、百目八・九拾文、既ニ目かへニ相及候、当年ハ古残糸も在之、軍乱ニも相成、糸ハ駄送附出も不成候間、蚕ハ不足可

致と存候所、左ニ□之、例年通置候ものと相聞得候、交易ハ不止言、事を聞候故か、如此、

一京都より御到来書写

伊達

其方義、先般被　仰出候沙汰之旨、奉畏此節会賊追討、勦絶可在之候処、未捷報不相奏、　宸襟不被為安候、於会賊、大義ヲ不弁、天恩を奉忘却、徳川慶喜返逆を助候罪悪、不容天地候処、遠邑辺陬之向々、未師之慎実難通候ニ付、賊徒等窃探応之使節差向候哉ニも相聞、不容易之義ニ候所、於其藩ニ東奥之大鎮、殊更思（義）君祖政宗勤王之偉功、今以天下ニ流芳致候名家ニ在之候間、領国近地右等之賊徒跳梁致候使節等、諸向へ差向候様之義有之、自然治平連緩ニ相成候ハ、実ハ

其藩思（義）君祖以還之武名ニ拘り候義ニ相当り可申候ニ付、其方父子戮力一心、且指進、諸藩ヲ鼓舞シ、一挙ニシテ会賊誅鋤奏功可有之候、依之今般嫡子左京太夫此辺不分帰国御暇被　仰付候、□子只管　叡慮ヲ奉戴之否奉□□宸襟之旨、御沙汰之事、

勅諚之写

徳川慶喜奉欺罔天朝、末終不可言候所業致候段　深被為悩　宸□、依之御親征、海陸諸道参軍之処、悔悟謹慎　［　　］

……（この間、落丁あり）……

［　　］之余別紙［　　］在之［　　］

来月［　　］

右日限［　　］沙汰候上ハ、更歎願哀願不被聞召思識両立確乎不可抜之［　　］候、速謹旧不可異儀者也、

一第一条

慶喜、去十二月以来奉歎天朝、剰兵力ヲ以犯皇都、達而錦旗ニ発炮之重罪たるニ仍而、追討官軍被差向候処、段々真実恭順謹慎之意ヲ表シ、誰亦申出候

ニ付而、祖宗以来弐百余年者、国之功業不少、殊ニ水戸贈大内言積年勤王之先業、不深伊実行相立候上ニ候処寛恕、徳川家名被立下、慶喜死罪一等被宥候間、水戸表へ退キ、謹慎可罷在候事、

一第二条

城明、後尾張藩へ可相渡候事、

一第三条

軍艦銃炮引渡可申、追而相当可被指返事

一第四条

城内住居之家臣共、城外へ引退、謹慎可罷在事、

一第五条

慶喜叛謀□助候者、重罪名々、依而可被所厳科候処、格別之寛恕を以、死一等可被宥、相当之所置致可言上候事、

但、万石以上ハ、於朝庭(朝廷)江可被為召候事、

右之通勅条被仰出候由也、

一田植、暦表ハ廿一日也、初り手前田植致候当町ハ十六日より始り、今十八日、昨夜大雨ふり、今日者雨ハ□而大曇り也、此節蚕鮒子ニ成、最早盛と成、田植前ニ而桑も不出、高直過る、十三日ハ庚申、専ハ十六日迄ニ而済、蚕ニ成、気候静ニ而宜候、

廿三日、在方田植最中、蚕者町方鮒子より庭子ニ成、町方最中也、桑直段ハ、今朝ハ一番安く、壱歩ニ五貫目前後、在方ハ鮒子と至而不出、桑ハ去年二度蒔之分迄取候、都而当年不宜桑多シ、田植之日用ハ四百文位より、其余在、

一会津御征伐も、遠巻ニ而、既ニ惣責打込と可相成候所、御指扣ニ相成、陣ニ御触、何様之御訳合ニ相成候哉、段々御引取ニ成由、尤一ノ関様御事、昨日廿二日御帰城被為成候由相聞得候、一ノ関様丈也、人数へ御賄肴被下分、一度ニ金五両ツ、懸由、米ハ七合半と申候、酒も被下、肴ハ五日隔、諸人足共ニ暮シ安く居候よし也、

屋形様并御曹□様共ニ御帰城被遊、当所御家中［　　］安老御子息弘平和光、

五ヶ年以前ニハ医学為修行、江戸表へ登、修行中蘭［　　］芸能秀ヲ表、国人江［　　］フランスニ渡り、三年半程留ル、［　　］白石まで来候得者、御人様ニ附、陣所江［　　］御召連られ、廿五日当地江御着、則異国人同様之風俗也、併遙之遠国へ渡海シ而、誠ニ珍敷事也、フランスハヲランタノ南隣国なり、日本より寒と御咄也、

近年ハ、アメリカ以来異国人入込、又ハ当方よりも諸異国□□□諸国之風俗見聞、言舌も大分通シ□□国者隣国之様相咄シ、古ノ京・大坂ヲ物語如ク相成候、

然ニ、会津御陣御扣ニ相成候事と子細在、追而書可申候、

一伊達・信夫郡ニ而拾九万八千石之地、是迄江戸御領地ニ候所、此度京都へ被召上、仙台江御預ニ被仰渡候ニ付、印杭共ニ御建替ニ相成候、殊ニ九條様当御年貢ハ半高上納可仕由、御手前様より被仰渡、百姓中祝ひ居候所ニ、九條様江伊達御代官より大金献上ニ而、前之通官領御代官被仰付度相願候ニ付、九條様より御免被仰付候事ニ而、夫々首尾合相触候ニ付、百姓中当惑之次第、承服不致、百姓壱〔一揆〕騎と相成候、御手前　屋形様ニも大ニ御立腹被遊、右御懸

合ニ成、其外至而三将之御方不宜事共有之、京へ御達、御払と成由、九條様
岩沼御陣所より御帰、仙府養賢堂へ、如以前被為入思召ニ而、御咄候所、
屋形様御指支、右之所ハ軍評定所致候間、御宿難成由、御断ニ付、又岩沼へ
御戻り相成候由也、是ニテ又壱ツ御沙汰出来候、
此節、江戸御籏元御家人等之浪々数万人、諸方へ分レ、所々国々ニ而事起り、
関東近国大乱ナリト申候、御手前□ニ而も、諸々容害ノ地、御境々厳敷御堅
□相成候由、出羽小大名方ハ仙府へ逃、欠込候方弐・三人、女中方共ニ御願
被為入候由也、当時惣御人数会津方ハ御引取ニ成、東方御家中并鉄炮組も追々
帰候、組抜中ハ未タ御暇御下知無之候、

一南御郡江農事仕付御人足為登候者共、御人足間ニ合候由ニ而、被相戻れ、帰
宅致候、

五月朔日、昨日より今日雨ふりニテ、桑大高直ニ成、先日中金歩ニ四貫目前後
取行、今朝三貫目者口明計セリ込、弐貫目前後と相成□、当年ハ他郡買人も少々
ニ而、余慶入込無之、然ニ桑ふき不宜、当年ハ下直ニ可有之含居候所、蚕も不少、

旁ニ而致之外買人多、高直也、今日ハ町方蚕師大困り、囲ひ桑無之、雨中ニ取方スル、

五日節句雨、朔日より毎日雨降り続、四日昼漸々幡ヲ立、五日昼より晴而幡を立、節不相応冷気、何分東風勝ニ而、快晴成兼、六日晴、日和ニ相成候

一蚕ハ、先立ハひき揚最中ニ成、雨勝冷気ニ而、一両日ツヽのび候也、

一桑直段、此節盛ニ出候得とも、常年よりふき方不宜、併去年ニこり候故か、当年ハ他郡之買人不足、故ニ当分飛上り高直ハ無之候得とも、三貫七・八百目三五位、今六日朝ハ引下り安く相成、六貫前後之取引也、蚕も去年より不足之□かと相聞得候、

八日より十方暮□、先月より当月ニ成毎日雨ふり、六日□□和、是も雨の印在、則夜より雨ニ成、七日・八日ふり、夜大雨、九日朝迄、五ツ時頃晴、又曇り、冷気ニ而甚気候不宜、節不相当寒也、鳥・むし共ニ、夏の鳴音無之、甚面白からさる模様、仍此節蚕、在方庭子□□方ニも改、余ハ同様不尺也、長引、桑直段不天気ニ付、毎々引上、五日朝□追々引［　　］貫五百目位迄、先揚蚕

もま［　　］落子多シ、如此高直之桑［　　］分難計候、此不天気ニ而田畑共ニ作物悪く、働成兼、大困り也、

十一日晴、日和宜、桑大下落ニ成、歩拾貫目位、追々拾四・五貫目迄、又十二・三日上而五貫目位、天気不同、雨勝、晴曇り、遅キ蚕者当分庭子ニ成、十五日晴曇り、六貫目位より落ル、十方暮長時雨ニ而、先揚り、手前抔も随分上蚕ニ而揚り候得共、まゆニ成、かき方見候得者、矢張下子多ニ而、くさり子不少、外々共々右之様子ニ相聞、疵多し、此乱世ニハ、蚕も存之外不少飼方致候風、

一当年麦之作、至而悪キ容子、例年より半作ニ難計と申候、実入不足、しゐな多シ、

一御城下より向南御郡道中筋、伊達郡□駅場、人足千人、千疋之馬相備置候得とも、軍不止、誠以難義迷惑此事ニ而、目も不当次第之由と相聞得候、当年ハ関国より奥羽之軍乱世騒キ也、百姓難義、当分奥郡・当郡抔ハ、些も楽ニ暮し居しなり、

一銭相場之義、弐貫□ツ据、此辺通用之処、奥方より南部之銭入込、岩谷堂ニ而弐貫四百五百文、此間三貫文ニ落ル、是より南御郡ニ而も、弐貫四百文位

之取行、仍而百文札ハ百五拾文之割、正金壱朱三朱之割と成、岩谷堂ニ而手拭壱本六百文と成由、驚入候次第、見世店商ひ成兼候世なり、

一軍之事、西国方薩長衆、京都ニ而謀計ヲ以、仙台を襲ひ取らんと吟味、当方重役之但木公・三好公ヲ語ひ謀り、内密々の味方と成、会津征伐を表ニ立、九条様并御三方当国へ下向、□（徳川）川家関八州之所ハ、仁和寺宮様等御三方□御下向ニ而、御当方会津御出陣ニ相成、戦始ニ相成節、　御嗣子様并大條様御下着ニ而、京都取拵ひ、謀計之御聞抜被遊候ニ付、会津御征伐御拒ニ成、直ニ御引揚と成、当方之御重役方反謀之姿ニ□□由、未実事不分り噂ナり、京方之御三人も、取拵ひものと相咄候、誠恐敷事ともなり、御用心被遊候故、会打之謀計御のかれ、其内ニ関東より上方勢、尚又伊勢藤堂家一同、白川御陣屋へ不意ニ押入、戦ニ成、敵も味方も死人怪我人多、御当方百廿人程痛、内名在御侍七拾人計り打死ニ成由、会津・米沢御両君、御当方の御味（方脱カ）ニ成、羽州・奥州方あら増御味方ニ成由、白川夜軍ハ思ひ不寄、不意之事ニ而、当方敗軍ニ成、然ニ会津若殿武勇之御仁ニ而、軍勢ヲ随ひ、大ニ戦、勝軍是ニ而、双方引陣、依之跡の戦ハ、当方味方の勢ニ而、遠巻詰之御手配ニ相成由、其後未夕不聞得候、

一九条様御三方［　　］謀事ニ相聞候処、又鍋島勢と申□百人程、先日船ニ而松島へ着船、仍［　　］ニ而、此節ハ仙府も落城ニも相成歟と、指含参候様子、然ハ当方色々御手段□□謀事之密書、当方加談、連判書等サ□シ取、御用心ハ厳重ニ御備ひ御立、些□□之八百人炮筒等持参候分、此方へ渡預り候様船より揚ヶ可申、無左ハ、上陸難成、打払候様ニと御欠合ニ付、無拠此方へ鉄炮武器を渡、請取御蔵入と成、

右之次第ニ而、九条様□□此度着之人数京都へ御達、御伺［　　］打払之御備成由也、尓時白川軍、御当方之勢と会津・米沢勢、遠巻ニ御備之処へ、又々徳川家之勢、日光山ニ籠居られル方々加勢と成而、御当方へ御味方ニ成、四方より西国・上方勢江打入、大ニ戦ひ、大ゐニ勝軍と成、西国方大ニ打殺され、大ニ敗走シ而逃去、仍而四方皆引陣ニ成、御当方勢も一宇御引取ニ成由也、□所奥山御家中も、跡拾人為御登之御首尾合□候由ニ候所、軍御休ニ相成候ハ、、御扣ニ成可申候、

一沢三位少将様ハ、鶴ヶ岡酒井様より、新庄之戸沢様へ被送、御当方へ被遣候ニ付、岩手山禅正（弾正）様ニ而御請取、同所御城中へ当時御預り之由、御手廻り之御人数計、其余ハ散乱ス、尤庄内ニ而殺され候者多シと申、一ノ関ニ逃参候

者弐人召取られ候由、何様振ひ偽之御勅使と相聞得候、其外醍醐少将様ハ御城下被指置、九条様ハ岩沼古内左近之介様方へ御預り、

当時軍場御引取御休　御城下并御境々々御堅め、一ノ関様御事も又此頃御城下へ御登、夫より海岸通一□□覧、御境辺御廻りニ而御帰城被成置筈之由也、

在々御士ひ段々御下り、無程御帰りニ成、気仙浜通り御堅メ、

一平治事、先月糸方為相談之、御城下へ登候処、今十七日迄下着不致、節角待居候、

一此間帰国之屋須弘平和光帰宅、無程御城御若老御役々、大石母田様より御召之由、当地之御主人様より御首尾合来り、　御上御用ニ付、早々為指登可申との之御事ニ而、早々親類方中へ下着見舞廻り、十七日出立ニ而御登被成候、

此節異国フランス江三人程参居候由、品々御相談之事共在□由、弘平左之義ハ異国人の談合甚弁利成事故、通事等之御用ニ御向ヶ可被成置哉、尚更蘭学諸事ニ能く通達之由ニ而被召出、

一御備御堅め方か、山伏　中罷登候様被仰渡、急速支度之事、廿三日此□登り也、

一小屋主共被召登之事、
　但不登者ハ、金拾両ツヽ取られ候事、

一山立猟師共、又々大急東山南方拾四人為御登之義被仰渡候事、是ハ山林中へ伏兵ニ御用ひ之由相聞へ、

□組抜中残り分、御郡奉行様御支配、早速罷登候様、一昨日被仰渡候事、廿三日登り、

一当所御家中も、跡分拾人登被仰渡候由之事、

五月十八日、今日日和、漸々快晴、天気、相応之薄暑也、但暮方より風替、曇り、夜より又々雨、十九日雨、東風か冷気、閏四月よりひしと雨勝、当月尚又天気日和至而無之、稲并諸作物段々悪く、引立兼候容子、大□困り案し不安事也、十九日・廿□大雨ふり、冷気也、

一米穀都而［　　］当町五升五合［　　］ニ付、惣而又々高直ニ成［　　］並□□壱尺ニ而弐百八拾文と相成候、恐入事、買求めなりかたし、せんだく成兼候次第、薬種小間物ハ追々損金ニ成、

一加州様ニハ、京都より大金ノ御貸上御用被仰、弐百万両と難義也噂候、右□□当時難渋罷在候間、金［　　］成兼候間、京都守護之儀相勤□□可仕との御答ニ而、春中御上京［　　］ニ而御登之由、右一件も薩長之吟味奉進、如此難事加州様へ被仰付候由、噂在之、当年ニ至候而ハ、長州様より薩州様之□何角威張、色々謀計在之、徳川家之根ヲ絶、根をからし、奥方大家ヲ小家ニケツリ（カ）、後ニハ大将軍ニ茂可成下地ニ而歟、御手前迄謀、南部江ハ八之（八戸）部様薩州より被為入御方と申、仍右ノ西国より御申合、大南部様ニ御談合相成事候、仙府之透を伺、御手配在之由ヲ以、此間ハ別而御備在之、一ノ関ニ而ハ専ら御備ひ、岩井川ノ長橋を引除、川下ニ而せき留候御用意在之由、

一箱根御番所ハ、去年より明通シ、御関所ノ堅無之相成候由也、然ニ、此度ハ関東方奥方迄一統ニ相成候哉、御手前様ニ而も箱根御堅之御用意御吟味在之由相咄候、聢与ハ不知候、

過ル十三日半夏ニ成、十八日小暑中ニ成候なれ共、ひしと雨天、冷気ニ而、薄物不着候、追々如何、不安夏也、気候も乱世なり、

廿一日晴而又曇り、廿二日昨夜より今日雨ふり、冷気、甚不気候、又騒□ニ相

成候哉、

一米相庭、若柳壱歩ニ八升位、壱石ニ付玄米廿四貫文、大麦ノ白ニ而廿五貫文、
銭表相庭弐貫之銘ニ而、金替弐貫四百文也、
一南部ニ而出銭壱万貫、川船ニ而買入分御指留ニ成、但是迄密物方御役人、当年
ハ御引上ニ而、何方も諸駄送米・雑穀共ニ、御構無之通用ニ成、但金不足ニ而、
存之外買方不成、
一醤油壱樽四貫八百文也、大豆ハ八貫文也、
小ツ壱升弐百八拾文と申候、とふふ廿文、
料紙不足、上［　　］ニ而、ちり紙宜物三拾八文位、殊之□高直ニ而、
売買六ツ敷、麁相ニハ難用ひなり、

廿三日朝之分雨、昼より晴、上日和、暑サ模ス、然ニ又廿四日五時雨ニ成、併
暑也、模様宜敷相成候得共、余り長々不気候ニ而、甚心支之夏ニ候

片倉様御屋敷へ御預り、ダイコ少将様ハ古内様方御預り

一九条様ニハ、上方へ御登、南部通北国へ御廻り、御帰りと申、仙府ハ御出立ニ成と申候、御供勢既ニ千人余由也、至而風唱悪く候、御供ハ薩州・長州藩追々来ル、鍋島家中と申、九条様ニ御用在之由ニ、七・八百人、是も直ニ御供ニ成出立、西方ハ何、三・四国共ニ諸浪人共多ク在由、

五月廿四日一ノ関御泊りニ而、南部方へ御通り成、御門送之為、大内筑後様御附添と相聞得候、南部迄送渡也、

一まゆハ、疾ニ出候得共、一統金も無之、直段も六ツ敷、買人無之候、蚕ノ作六分通之作多シ、又ハ半作、上作と申ハ、八分ニ手取ハ上なり、元上り高直ニ而不作、稀ニ一升金三歩位、売候者在之、少々売ル、連日不天気ニて、何分うち出ニ宝入ニ成、右直段より所々売候、

壱両位ニ而

廿五日天気、暑さ□模様宜候得とも、晴曇り不定候、夜□、廿六日曇り、不同不定候、大麦実□□悪く、当年一統不宜、殊ニ長雨天ニ而［　　］大ニ悪く成、何レ五分・六分通之作也と申、諸駄送米雑穀共ニ御構無之通用ニ成、

一右九条様事、此度之征伐方、御手前様ニ而専ら御疑心在、殊ニ御嗣子御下着被遊、弥々拵ひ物之事、近衛様抔ヨリも御添心、御内意等も在せ候由、幸ひ米沢公上杉様、白石御陣　屋形様御来駕、御対面被遊、諸事御咄合、御酒盛、緩ニ而御宿へ御帰、御取扱も宜被為在候ニ付、御［　　］悦ひ、安心之由、全体御用心在而、三千五百人□□此節如何と御心配被成、御入之義［　　］御機嫌も能御取扱ニ而、何角御談合在［　　］一統悦候由也、依之拾六日より御両所様御同道ニ而、岩沼御陣九条様江為入、何角御咄之上、貴所様御事、九条殿ニハ御年若クシ、御子息様ニ而も御座候哉と御問ひ被遊候処、成程忰也、被仰御惣領ニも若シ如何と、押而御問被遊、何角と上杉様御両君ニ而、利ヲ被為推、御欠合被成、其処ニ而、実ハ九条三男ニ而候、此度会津征伐之義、薩州・長州・筑州等、　朝帝ヲ拵ひ、勅命とシ而、我等相下シ候事也と、実事ニ落られ候なりと申候、仍御征伐御扣、御引取ニ而、御帰陣被遊候、弥々引繰返、味方ハ敵、てきハ味方と成、関近国より此方、西方ハ敵と成、東方ハ一統と可分也、唯南部ハ御油断不成と御用心在由也、九条様并上方勢、大ニ威勢落、御供之者共、所々ニ而殺され、御手前様ニ而も、御宿所

へ火ヲカケ焼カンと御吟味も被成候由之所、左も不成、早々被相登候、右之次第故ニ、奥羽両国并近国御大名様御願之義、其外諸事京都江御上書被遊、侭人右九条御内諸太夫、御城下より直々為御登［　　］より御目附役御儒者壱人御添被御登候由、右御供望ミ、当所之国分家督元松老上方一見、殊ニ為修行之、序を以登り候由なり、右ハ当分師弟之間ニ而、如此、

一九条様御事、水沢ニ而川支ニ付、御滞留之所、南部より当国片御通りニ候ハヽ、宜御滞留、御止宿ニ而者国内へ御入之義相成□□人数不足、又ハ人馬等不足、御継立六ッ敷御坐候間、首尾合相成兼申候間、御相対を以御通り可被成置候段、御断ニ相成候而、当時御欠合ニ成、南部ニ而ハ国内江入不申由、何方成共他国へ御通可被成由、欠合中仙府へも追々と御早打参り、追々と御人数下り候而、合戦ニも可相成哉と相咄、色々噂在之候、

此間之御通、千人已上之御人数ニ而、東山江も加馬遣候由也、人足等割合参り、当村より九拾人程、如此痛ニ相成候、折々加馬人足来候、

一御上より又々大金之御貸上、御領内へ御内八万両、此内御城下ハ三万両、在々ハ五万両と申候、去冬より三ヶ度之御用金ニ而、当百性方難渋ス、殊ニ此節銭相場

崩れ、定り弐貫文と申せ共、売買両替ハ弐貫四・五百文、鉄大セん三貫文迄取引在之、商売ものハ買元次第銭もの至而高直、店［　　］甚難渋ス、尤商ひ無之、市不盛、

一米五升五合より　大ツ八貫文
三盃
濁酒並壱盃八拾文、山川上百三拾文、

一暑気ハ大ニ進候得共、毎日雨ふり、晴曇り、如雷気也、当月中不天気、大麦かり方未ニ不極、至而不作、甚困り、まゆも扱ニ困る、去なから直段不安、壱両ニ而も売人不進、作ハ六分通之作ニ而、利潤無之年なり、

廿八日之夜大雨ふり、廿九日晴候へ共、存之外曇り勝、八ツ過より冷気ニ成、風替候、

一向ノ皆清旦方登居られ、桑折御附屋より五月十五日出之手紙相下り、一覧致候所、何レ白川不意夜打ニ而、御手前方敗軍、打死ハ廿八人程、名前付［　　］御供之方也、外怪我之者三拾人程也、逃［　　］様、同所御堅ハ瀬上様と

［　　］打たれ困り援軍、此御方は［　　］註進ニ而、
白川御陣屋［　　］跡弐千五百人被遣候、節句五日朝□倉（片倉カ）様□
□□石川様御人数御出張之由、奈須野（那須野）ヵ原辺大合戦ニ可成と、敵方八百人程
打死、東当方百五・六十人と在之、
会津御味方ハ大ゐに働く、米沢方も同様、

六月朔日、昨夜より雨、昨日昼四ッ時之土用入、尤□ノ日也、［　　］相成、
暑気直、是より日和続［　　］居候処、時雨より直、今朔日雨天ノ□気成、
何分迷惑す、五月中一日も雨無之□ハ在間敷と申程也、当時合戦不止、気候□
同様、天気不定候、二日晴、曇り、随分暑さハ在、何分雨気、難晴、

当御家中より七人登候　九条様も御附之分六拾人程、右御方之分計り御首尾合
也、人馬出も除之分御首尾合無、片通無御構と成、一宇片通りニ而歟、盛岡御
城下も御通構容子也、
昨夜徳治義、中新田より引込来る、同人咄ニ、同所辺ハ薩・長・西国方と申者等、
最上より出入、其外羽州方出入多ニ而、至而物騒々敷故ニ、御境目御堅厳重ニ成、

岩手山（岩出山）様ハ御知行所ニ而、尻戸前（尿前）口銀山残之口々、是ハ近辺之道楽（ラク）・何分悪党人共呼集、此所御堅人数ニ被召遣候、小野田山入最上越之簡（カン）道、此間見出され、さむ沢（寒風沢）と相唱候由、平地ニ而少之山在而、関と成、相堅、沼壱ツ在、甚深シ、此所真山賢蔵様御堅メ被仰蒙、御人数百七拾人、此近辺間（カン）道拾ヶ所已上在、一円不知道也、外百人程被相付、中田町（中新田カ）ハ、同所御地頭只野図書様抔御堅、吉岡迄之海道辺、并御境目口々より、御城下迄之間、半鐘・釣鐘等大音□□百位被相立置、御註進之御用意ニ成［　　］也、前より至而さひしき事也、御城下も、道筋小路々口々夫々御堅め、大町壱丁目迄、御城下目明シメり役今助ニ被仰付、御堅、此今助、頭も桜田先生之門人最竟（最強）之者ニ而、高名之働ス、外岩手山町百姓森岩出山武道（喜之助）具師成、桜田先生之門人ニ入、武芸ニ秀而、達人と成、軍御人数（喜之助）ニ入、先達而軍始之頃、薩・長之内参謀成将、玉薬等之長持弐太、荷物等持参、白川町旅人宿へ付、仙台御加勢成と申ふらす、全ク加勢ニ不在、謀計者、仙台之透ヲ窺ひ、事ヲ可計之者ならんと、此方ニ而吟味、仍而右ヲ喜之助壱人差向、敵三人之内弐人、用在而出ル透を見合セ、壱人ニ而此宿へ入、何角と論シ、忽チ双方刀へ手を掛、白眼合、敵より打掛□シスル処、小刀ヲ打翔、直ニ切込候処、先も抜放［　　］込れ、只一打ニ切殺され、首ヲ取

□出□別□□者、帰り来而、戦ニ成候得共、喜之助達人之働ニ而、弐人共に打たれたり、仍而三人之首ヲ取而帰り、驚入たる働、御誉と成、右玉薬、外品・金子等迄、右喜之助ニ被下、追而者侍御取立ニも可相成と在之、是皆如推察、謀計薩・長之廻シ者也、前ニ印今助ハ、間者聞抜ニ、白川辺ニ居、仙台目明道楽物ニ而（付合）、矢張長・薩之謀師也、旅籠ニ居遊女を揚而、楽なから仙台出陣之容子ヲ一見ニ而、上方江註進、又ハ南部方へ、諸方之味方へ註進之手紙等認スル処、密ニ飛脚等頼由、大切之飛脚也、是ヲ聞抜、仍而今助其所之味方成者ヲ頼、右遊女ニも廿五両とか金ヲ呉、其客人認たる密状、上方為登之手紙取らセ、奥行ハ古川町迄届候訳ニ而、持参致者、途中ニ而喜之助右之者打捨殺シ、手紙ヲ奪取、手紙共取揃、御向方御役々様へ上ル、右謀計成薩人逃去、是皆仙府公出陣御留主ニ成容子ニ付、早速申合セ出陣、不意ヲ可打との註進紙面也、右ニ而実事謀計現れ在、既ニ　屋形様と上杉様との、九条様へ御対談、御欠合ニ而、実事相知御帰り、直々薩・長之謀上瀬良（世良）修蔵ト言者、白川町宿屋ニ滞留居候由、早速□□詮義致見可申段、　御前より被仰付、剣法□（優カ）レル者拾七・八人程指向ケ、右之者欠合之上意□□果シ、諸書物見出指ル、尚又同人より［　　］手紙持参之者、足軽道中八丁目駅［　　］前之御小人弐人廻シ置候処、疑敷者と弐人

ニ而召捕、詮義之上、書状集取見候所、無相違修蔵之手紙飛脚、右之者敵方成ニ仍、切殺、捨置、書物御向々江［　　］右修蔵持合候書物、征伐之巻、外謀計偽之事、御国方之諸士連判一味之□名前書委細ニ有之、諸方ニ而密書等廿四□御取上、仍而会津御征伐被相止、早□引揚、屋形様ニ者早速御帰城被遊□［　　］御堅メ、御城下所々厳ニ御堅御用と成［　　］五月十七日薩・長之士、何者共全体ハ不知、何方より来候哉、中新（中新田か）ニ一両日も滞留致候哉、岩手山通出羽へ越道□御小人弐人追掛先へ廻る也、出羽御境目ニ而指留、欠合致、理合詰り、太刀先ニ而可通候と申、駕籠之内より壱人出、士六尺余在之大ノ男、誠ニ大成刀ヲ持、立合ニ成、外弐人之士在之、御小人弐人ニ而打合、戦ひ大ニ働、大ノ男切臥、弐人之士も弐人ニ而切殺シ、三人之首ヲ取、荷物七駄有之、早打御注進、右之首箱入、流久包ニ而、中新田通一宇為御登ニ成、荷ニハ火薬・玉等、其外衣類道具、金子四五百両在之由也、此乱ニ及已来ハ、御国・他国、右之様者切捨御免、右様之持道具ハ都而打取候者へ被下置、尤夫々御賞被下置候段、兼被仰渡置、皆々被下置候なり、疑敷者ハひツ〳〵と召捕れ、皆不為騒し而、あら〳〵謀士之曲者、謀計謀反之者、御召捕と成、誠以能御計略、御上屋形様之御思召も結構、無失無用之御手前、人を不被痛、御高名也、下々迄難義御事也、

一御国方一味之主立、御高役釘〆之閉門、大寺之和尚壱人、残りハ追々被聞、尚白川之軍江被遣士共より、態と相死ニ為致候士在之、敵方之手ニ而殺立之、能御手段也、西国方より海上数拾艘来沖合ニ居、仙台之容子次第コキ寄らんと見合、無軍静り、西方謀計破レ、船不寄［　　］船ハ、肴并ニ米穀等迄取出［　　］之依而漁船共、右船之近所ニ不寄候由なり、若右軍船着岸致候ハ、、次第承り、武具此方へ相渡候ハ、上陸為致、可申無左ハ上陸難成と断り、上へ申間敷被仰付、津々江御堅番人の巳、大勢之御堅無之候、只緩々とし而、戦を不好、鎮めらる御吟味と聞、仍奥方之成行容子、諸為言上之、先日坂英力様御登京之由、此節御用多ニ付、大條様も被召出、御出役ニ成と承り、鮎貝様ニハ御若老ニ被為成□□□□表あら〳〵他国客人惣体［　］［　　］屋へ替り番ニ而御備堅上下ス　御他領上方表共ニ　　屋形様之評判宜由也　加州様ニも御手前様へ御同意被成置候由也

一此度御軍用御備金、出羽鶴岡酒井様より、金弐拾万両御借受被遊、当時拾万両被相渡候分、中新田通御運送入来候由、尤右御役人、鶴岡ニ七日御滞留、結構之御馳走、御門送之節ハ、御のふ（能）ニ而御見送之由、右ハ度々御セ話ニも被為成、尤事起之始ニ、酒井若殿様御入らセ、

屋形様御対面、何分ニも小子か家之相立候様、幾重ニも御願上候由候、実ニ御泪ヲ流され、御頼被仰上候処、屋形様之仰ニハ、貴公ハ御年若し、大名ハ左程泪ニ不及物御座候、花咲節も可在之、節時ヲ可被待、奥陸（陸奥）守心中ニも御座候間、左程御案シ被成間敷と仰在而、大ニ御悦ひ之御容子ニ而、若御軍用金御入用御指支之義も御座候ハヽ、拾万両位ハ早速ニも指上可申由被仰候事ニ相聞へ、彼是之間も被為在、御役人方御吟味被仰遣候処、早速御承知相成、先以拾万両被相渡、是ハ御用達酒田表本間氏より御繰出ニ相聞へ候、御上首尾、右為御礼、御馬三疋・虎ノ皮三枚・御幕弐張被進遣候由、然ニ又会津様より三万両被進上来ル由、依而ハ先日八万両、御用御貸金同様ニ可相成由也、外ニ又徳川家一ツ橋□より金七拾万両、并ニ剣・鉄炮□□挺□□□被遣候由也、

箱根御番所御堅ニ付、御役人被遣候処、右ハ関東近国之諸士ニ而取堅居候間、仙府より被遣ニ及ひ不申、此方ニ御備之由申来候由也、

此事ハ未タ不知、色々様々咄在之候、何分

屋形様之御仁勢・御威光弥増也、

尓時又日光宮様、近頃仙府へ御下向之由在之噂在之、何様□□成哉、若西国方と御手前様之□□□事ニ而も可在哉抔噂致候、何分西(カ)国方ハ謀計破□而、大しくれと成者也□所ニ而、和睦も宜敷方也、何様大平成処、万民之□□□願度也、

毎日々々軍咄不止、次ニ不天気咄専ら也、上々様方之揉合乱ニ而下々同様天ニ通、天気不定、乱同様なり、御城下表軍咄御停止御触也、

六月三日ニも矢張雨ふり不止、昨日ハ半日晴、今日ハ不晴、諸作物不宜、困仕事遅く成、

一当年蚕種まゆの生れ悪死籠多く、種分付至而無之、五升之まゆより種壱枚、外弐枚出ル物稀と申、至而高直ニ上ル、伊達も此節道中厳、定飛脚屋者休、容子不定也、種之事同様と噂さ在、飛脚屋ニ而書状壱通金壱歩位ニ無之候而ハ、受取届不申候か、仍不通也、此辺へ兼而之様まゆ余分買入候者無之、一ノ関方ニハ相応買入之家も在之由、地種取多シ、又此間夏子種買望人多シ、来年種も望人多シ、

一御上行ひ糸方も不分り、未タ不定、右ニ付御城下者銭相庭同弐貫四百文、諸品弥々高直、但木綿ハ少々下直成と申候、

一軍咄厳ニ被相留御触出候、此節角力芝居□□□□被相免、勝迄□□興行無御構ひ之御触也、

一真綿下落、伊達共ニ当地之綿両弐百目ニ而者引合不申候由也、生糸も下直ニ成、何れニ当時不通用、

一伊達も種至而不足、郡村至而無之大高直、当国方ニ而も専ら所々種取方見候得とも、郡村無之、皆止ル、至而高直ニ上ル、高橋屋例年通国方一統廻り調見候処、四千枚位外出来不申候由、至而不足也と申候、御上ニ而為買上之御吟味被為在候由、

一六月五日□□□□□□□日も昨夕より大雨、今日雷神様精進天気祭、一統奉願上候事也、所々川々洪水、屋き通水推シ・水かむり、中奥辺菜種・からし皆はちけ、くち捨り多シ、同日終日大雨、洪水両度なり、

一南部新銭多く入、殊ニ相庭崩レ、甚紛乱ニ付、通用右銭被相留　御停止相成

候段、御触相廻り候、

一連日之不天気不常、弥不作ニ可相成模様也、誠ニ此乱世ニハ、殊ニ下々難儀之節可相成、殆と当惑之事也、　上々様御政事崩れ而、国々諸侯方起り、乱と成、下々者金銭崩れ乱ニ成、然ハ天気も乱と成道理と相見へ候也、古ノ乱世ノ時より、此度ハ軍戦当時少しと申共、一体国々事多く乱れ候事者、古より乱れ候様ニ相見得候、当世之　今上皇孫ハ未タ御幼年、尤御即位之御事□□候、仍而能不納□□歟、何レ乱之時□□□□□へし、
法

六日も雨天、至而冷気也、此節米売人無之候容子、な□らむし出、困り入候、麦打可致日和無之、

七日も夜より朝□□大雨ふり、四ッ晴而、昼より上り晴、曇り暮方□もよふ也、

八日朝晴ニ而□□□□□□少晴曇り、何分風□□□、此模様ニ而ハ不作ニ可成な

[　　]

一此間毎日之雨ニ而、北上川大洪水ニ成、七日町千賀之助之家二階迄水届、日

形町此度ハ土手不切無難、同所流之水ハ五年計り已前也、其節より些余慶と申、七日町より上ル水したし、二日町迄揚る、一本杉迄大水也、西郡町七軒程流失、黄海海道筋、久太郎ノ家督、隣へ手伝ニ行、帰ニ入水ニ而、歩き兼而死ス、上川より家并人共ニ流れ通る、死たる体ニ見得候由、痛入候次第なり、外ニも所々可有之、今日承り、如斯印候、　閏四月より五月中、当月迄引続キ毎日五十日雨天、珍敷不天気なり、近年無之大水、

一銭相庭崩れ、脇々御城下共ニ弐貫四百文ニ相聞得、当町弐貫文ニ而不釣合ニ成、弐貫四百文、余所之通商人仲間寄合吟味、御両役江御届御披露致候事、右之次第ニ而、商人店ニ何分小売方者損金ニ相成候、半ゑりニ相用候、千草の木綿一尺□弐百三四拾文也、開白無之世□□□□□、

一九日□相庭□□弐貫四百文通用也御触出、千厩迄来る、南部出の大セん、彼ノ国ニ而ハ殊ニ大下直、悪セんなり、拾貫已上之由也、

一毎日之雨天無止事、東風又ハ北風ニ而至而冷気、弥々不作ニ可相成模様也、

一大麦者、はせニ而生蒔出、一統青麦ニ成、殊更痛之、可打日和無之困候、

一大川筋□□□□□□窪地之所、大豆并□□□□□□之跡水不引、水くさりニ成由也　畑之仕事も不成候、

一十日、丈七御城下より帰る、同表辺者、此近辺より雨不降、和渕辺より奥、
何方雨繁ク、路・海道大ニぬかる由相咄候、
一白河より向、官軍と申上方勢度々罷越、同所之御堅へ推寄、当方瀬ノ上主膳
様、同所之御城ニ御堅メ両度程敗軍、米三百俵并鎗三百筋、金子大分、御城
迄乗取れ候由、仍而　屋形様御意ニ而、御同人御引戻候由也、万一打死も難
計と被思召候由、御替り番被相登、江戸辺ニハ官軍勢三万人程居候由、近頃
ハ藤堂家度々押来ル、
一伊達生糸、取引も下直、上新糸四十五六目より五十目迄、壱箇百八拾両位、
当時金も下り無之故不印、逼白(迫)之由、
同所桑直段、正ニ七貫目ニ而金弐両弐歩、三両迄、
一種まゆ、春白壱貫目ニ付三両弐分、四両、上拾両迄、
一春白種一速、中三百五拾両より四百両位、
白まゆ種者下直也、
一白米、歩三升、下直□迄、玄米四升より五升、
酒壱升［　　］百文迄、
銭ノ相弐貫四［　　］文迄、

伊達　　伊達

一生糸古弐拾□□□□□□申安文、横浜客人弐百両之直□□□と申候、

一江戸軍、五月十五・六日合戦、徳川勢弐万人余上野屯（タムロ）ス、官軍勢推寄炮発セス、徳川方地雷火ヲ以焼立、上野より日本橋焼□ス、其後千住ニも合戦在之、矢吹ニ□罷在、何レも官軍大敗軍と申候、［　　］評判角力見立書在、

一御手前様之事［　　］評判宜［　　］大名様方御贔屓在［　　］然ニ又南部様ニ者、秋田・津軽之両所御同意ニ而、仙台へ敵対被成と言事ニ而、南部・秋田口厳重御堅ニ相成候由也、当御地頭様方へ之御人数御割合来ル、

一当月四日、六月中ノ節也、暦表大暑ニ成、尤中ふし　六日より八せんニ而、引続毎日之雨天無止事、凶作ニも可相成歟と、人々心支致居候処、十三日雷神様一統精進、快晴奉願上候、□四日庚申　然ル所今日俄ニ快天気宜、暑之模様ニ成、

十五日弥日和ニ相成、右ニ而人気少々直候、

一生糸此間小糸少々ツ、取引ニ成、直段ハ壱目ニ付〇弐百文位、銭ニ行当り、
皆少々ツ、売払而用ヲなす、

十八日晴、曇り、昨日八専之終り、土用も十七日迄、朝五ツ時頃きり雨少ニ而晴、
日和ニ成、此間之天気ニ而麦打専ら多シ、何分麦者至而不作之年、六分位之取納
□一統ニ而者五分之作と申候、是□□□□□□気続候ハヽ、七分位之稲ニも□
□□□と申候、何レ未今日之処□御暑気薄し、

一気仙浜沖合江、唐異国船、西国勢か数艘見へ候ニ付、是江も遠見被相出、松
崎様御堅め御手配之由也、追々浜手江詰る、当町も往来ス
一所々方々江、御人数被相廻、御家中諸御侍往来繁し、当御地頭御家中よりも
浜方へ詰る、
一生糸者、御上行ニ而、奥買方為御吟味也、平治［　　］不仕候ニ付、
十五日宗兵衛容子聞為迎之［　　］也、

十八日きのへね、日和□也、□十九日晴、曇り、昼後よりきり雨ふり、暑サ進

候得共、廿日もきり雨、晴曇り、日和不定、今日寅ノ日也、
麦打日用三百五拾文

一西国鍋島勢、南部ニ居、此間一ノ関へ七拾人程罷越、当御城借用致度由申入、仍一ノ関方御挨拶ニハ、随分御用達可申との答也、依引取候、
右ニ付、弥々南部方西国方へ一味可有之、仍而弥々御備ニ成、海道筋・橋等へ、地雷火等之仕懸被成、往来自由難成、在方細道ヲ明テ通用ス、九條殿ニハ秋田江御越之所、又御引返、南部へ御入と申候、

□二日雨、廿三日雨、向ノ皆清旦方昨日下る、

□日（先日カ）中ノ軍ニハ、御国方勝ニ成と相聞へ候、其先之軍ニハ、陣中無首尾ノ御方、御呵りニ成、半地召上ラレ候御方弐人、大松沢様ハ大働ニ仍、廿五貫文加増被成由也、
一米五升五合、大麦白六升壱歩也、
右当町相場、併弥々快晴、残暑無之、余り雨勝、仍而ハ今年の作弥不作、何

程位とも見詰難立候、誠□□難義之事也、

一廿四日晴ニ成、曇り勝□□□晴曇り同□□七ツ頃雷勢在、雨□□□雨、廿六日晴□□り、

此間之大雨ニ而、又々川々□洪水不少、田畑推流、川筋作物一宇流失、大痛ニ成、保呂山祭も不盛也、諸品弥高直、残暑当分無之候、

なす・木ウリ、一ツ拾三文位、

廿七日曇り、此方大こん・そは蒔方、

毎日曇り勝ニ而、尓今快晴［　　］

囲ひ無之折節故［　　］

廿八日曇りニ而［　　］也

未上ケ不申候、矢張□五合位、大麦白六升、

一大豆者八貫貫（ママ）文、小□□升三百五拾文、

一なす　拾六文、上ル、

一木ウり　廿文より拾八文　一濁　八拾文

一上酒　壱盃弐百卅文より弐百文

一月代髪結ちん、先月より五拾文、又ハ四十八文

一海沖合ニ、軍船数多懸居候故、海岸通御備も厳敷、依而浜方漁事遠く、出船難成、尤沖合ニ而、漁肴軍人ニ奪取られ候間、近く可寄様無之、依而近所ニ而小漁計り、甚難渋ス、兎角肴不足、殊ニ高直也、ぼやふし壱ツ三百廿三拾文、

一西国鍋島勢、南部へ居合候所、何日ニ何方より出抜候哉、逃去候由相聞得候、此節南方軍戦之容子無之候、色々風唱在、

七月朔日同曇り勝ニ而、晴間無之、今昼九ツ時日蝕少シ、二日雨ニ成、きりなり、稲は早キ分四五日前より出穂ニ成、何分快晴無之、冷気也、昨日雷神様精進御礼也、

一山立猟師道々不□□□間、村より弐人出立、此間□□□毎日小雨□快晴無之候

七日、今日快晴ニ相成候得共、弥々冷気勝ニ而、暑気無之、諸作草生計り宜、出穂ニ相成候へ共、天気暑無之故、花も実ニも不成、惜哉、

右ニ付、人々弥凶作なりと明らめ候風也、当年凶作ニ而ハ、雑穀より不作、稲米ニ成兼候ハ、□□之凶作より難義可相成と、人々大□ニ心配致候、御上ニ而ハ存之外騒□□□か、何之御沙汰尓今無之候、

一生糸□　御上御［　　］様、御吟味も不定ニ而、如何□□□□□帰宅不致、大ニ困り居候、異国人□□□□参り居候間、御交易之御吟味之由なり、伊達ハ軍ニ而、糸大下落、

一当時軍方如何候、別而容子無之候、

在町方店商売休同様、銭ハ歩ニ弐貫五六百文、金切替相庭ハ弐貫四百文、定銀壱匁ハ百六十・七十文ニ当ル、金ハ壱両ニ而、文金壱歩ニ□□也、商売不成、壱匁銀ハ四双倍ニ而、六百廿文ニ成、何分損金ニ成、割合通ニハ、小物売可申様無之候、開白無之世の中なり、

一丈七九日夜下ル、伊達・白川、先軍事不得止事、軍在之、御国方敗走度々成□内働高名之御方、小野村之富田様、大力無双之御仁ニ而、八貫目鉄棒ツキ、

陣前へ出□働キ、敵方七拾余人打倒シ、弐百人程ケか（怪我）、味方三拾人程怪我人、又壱人橋本何某と言人、大ニ働、七人之首を取、其身所々大疵ニ而、漸々会津方へ入、助ケられ、仙台へ送られ、又壱人四人分当小身士ニ而、兼日道楽也、此度白川へ被仰付参候所、福島辺ニ而、同道楽・無性師共へ相談いたし、博奕ヲ始、同類ヲ集め、金三拾両ヲ出、酒代ニ遣候而、軍之事ヲ咄候所、一統得心致、所々より集八拾人程引揃、右之者皆□□□戦場江出ル、大ゐニ働キ、高名大［　　］并ニ一方へ添八百石之御加増［　　］参集前被下［　　］雨天［　　］不相出、皆々武勇［　　］

［　　］五六拾人ニ成由、追々働候而も、士［　　］双方被置［　　］

［　　］仕也と［　　］勝敗［　　］仍而　若殿様今［　　］

一上野東叡山宮様、会津より御国御城下へ、当［　　］日御入着被遊候由、御宿ハ御宮町の権現御［　　］付ハ三拾人計り、御女中様［　　］松島辺へ御着之［　　］御城下御上下大取込也と申候、

一七月九日より十方暮ニ候得共、今日より快晴相成、十日弥々上日和ニ成、大ニ人気宜、併十方暮中ニ而か、朝夕ハ冷気ニ成、

過ル八日、御郡一統之日和祈精進御触ニ而、いたし候也、

同十日夜、平治帰宅、生糸方御取行ニ付□成行之次第、取引振并善悪等目利□次第右御役人様より御呼出ニ而御尋申上候、□買人ニハ御城下新伝馬丁白鳥屋利助殿被仰付、奥方右買宿買人平治へ被相頼、則皆川久蔵也、依而金子も被相渡、御暇ニて帰宅ス、三ケ月ニ而下候、

糸方、先御役松倉良介様御出入司ニ御進、其跡之御役人手柄（手塚）之義庄左衛門様御談、此度急御買入分廿五駄也、異人江御引合分、急ニ大高出立御請兼候由申上候ニ付、御国中御郡々江御割付ニ而、御買上之御首尾合ニ成、併御郡方御買入六ヶ敷容子也、前々御買入御勘定不立下、郡村在之下々人気不宜、埒明申間敷と咄也、

一此節共ニ　御上ニ［　　］徳治様御金方［　　］渡候金□□役ニ而、大ニ取込、御上御金□□□候得共、米穀ハ大分御持合ニ候よし候□□米方ハ一円不騒候なり、

中奥より御城下辺ハ、凶作抔ニハ不参と、恐不申候、稲の模様宜候由、御城

下御蔵米五切半也、奥方と［　　］十一日も日和宜、弥々続候ハ、
［　　］之作ニも可相成哉ニ候、
併関□□伊達辺□□大高直、
とふふ壱丁八拾［　　］三拾より五拾文位
御城下ハ、月代髪付ちん七十六文□□
軍場辺ハ、御買入ニ而被相渡金壱歩三升ハ安直段馴共、米不足に付、福島より米御無心願出る、仍而千石米御貸被下候由也、戦場辺ハ御大切ニ而、如此也と申候、御手前御陣所へハ、遠路ニ而駄送成兼、

一軍も、前々ハ此方敗軍多シ、品ハ西国方鉄炮、壱筒ニ三放シ、四放と打、尤皆不替筒多シ、仙台ハ軍ニ不馴、一通之炮発、尤廿日三十日之入替故ニ、軍ニ勢力ヲ不入替候故ニ、勝利少し、此程ハ替番無之様ニ被仰渡、是ハ先達高名□手柄ニ而、八拾貫之御加増ニ而、参謀ニ相成候細野屋か□太夫と言御士より御達、軍ノ法前々不宜と次第被申候、□□候ニ付、無御異儀由ニ成、御法レイ此方の次第ヲ御用へ也、殊ニ仙藩ニ而ハ、誠之軍人と噂サ相成御方ハ、右御仁、并冨田様、芝田ノ御家督父様泥ヲ雪かんと励ミ、大ニ戦功在、小身

之御仁ニ壱人、次鮎貝様、此四・五人ニハ、敵方ニ而恐入候由也、
当月二日之戦ニハ、岩城ニ而敵人追打、船入逃出也と集る所、大炮ニ而打、船共焼打、数百人ヲ痛、船三艘、諸道具共ニ被取上候、高□□□□之城、敵方乗取居候所ヲ追出、此□ニ成敵勢ハ、多く逃去候由［　　］人数［　　］加州様ニ而［　　］江戸迄攻登［　　］御待受［　　］候由、此方へと御合□ニ成事ニ相聞得、江戸勢江も御助情［　　］候由　宮［　　］宮町権現堂ニ而、五穀成就・武運長久御祈祷也、
当時上方・江戸為登飛脚□□通用難成候、江戸・京・大坂飛脚、金百五拾両位、□□越谷越間道ニ而往還□□致成、八ヶ所々ニ而道案内ヲ頼、度々金遣多キ故高直也、松島迄ハ通用宜、江戸行、伊達行共々、海船ニ而も六ケ敷、
右□□伊達行ニ而も、金□七□□□、売道不通用、
状壱通壱□□位

十二日風追なり、朝曇り［　　］晴上々日和ニ成、此間之天気宜、稲大ニ出穂ス、十三日も曇り、時雨、

十三日市、此世柄故不盛、古の十分一也、
一午房壱把　百廿文位、塩壱升　三百廿文、大小ニ而
一なす・きうり　壱廿文前後
一蓮葉弐三枚ニ而　一把廿文也、
□盆棚こんふ　壱把百五六拾文
　　此品ハ別而不足、弥引上る由也、
右直段故、諸品同様
一糸綿　御城下ニ而ハ金歩ニ百廿目、是少々上る
　　当地ニ而百目壱歩
一当町白木綿切、一尺中品百八拾文、中形物弐百四五拾文、縞類品物次第、
上三百文位迄、仍而専ら地木綿宜仕出候□、皆々口糸・大口糸ふりまゆ引
出ヲ用ゆ、
一真綿ハ大下落、金両ニ弐百目位、
右ハ伊達より仙府参り売る、当地之品ハ買人無之候、大まゆ・揚まゆ共
ニ買人無之、殊ニかけちん高直、壱升五六百文
［　　］助殿申受

一生糸御直行ニ而［　　］手前も奥［　　］船頼候得共□□□御金者此
［　　］糸方へ御渡方御延引ニ而、末［　　］宗兵衛御城下越益ニ成、

弐百十日の当日也

十四日晴、上日和成、稲追々出穂ニ成候故、人気□□□成、此地涌津、又金沢
町五・六軒焼失、□も［　　］夕より雨、今日雨ふり、十六日曇り、十七
日晴［　　］十八日雨ニ成、同夜より又大雨風ニ成［　　］飯後嵐と相成、
丑寅ノ風騒ク、大嵐と成、益前之日和ニ而、作物大ニ直り、出穂致、未出払不
成三分通残り候所、此嵐ニ而、田畑物共ニ痛与可申狂ニ、大ニ困り候事也

一上方京都大坂ハ無事、近国四月より雨多候而大洪水、近江・美濃・伊勢、百姓家
凡弐千軒程流失、人多く死ス、田畑水推シ、和泉・河内も水、繰綿押流不申
所ハ朽捨り、三河・遠江共ニ□痛、早キ所ハ次種蒔候得共、如何、何分綿ハ
□□之見詰ニ成由、作物惣而大痛ニ相聞へ候、
□之与市、壱丁目日野屋店、上方用事被登、四・五人ニ而六月中旬、道中大ニ
難義致、漸々無事下着ス、西国方京都ニ登り居、如江戸之、然ニ道中国々放
乱シ而、村々江押入、往来ヲ妨ケ、切取・強盗、又所々ニ関所堅メ在之、海

道難通り、山越、谷越ニ而通る、大ニ銭入甚し、海道共ニ同様、仙府より諸仕入、江戸江横浜等ニ罷越候仕入荷物、浦賀廻ニ而御積下候荷、薩摩方ニ荷問屋へ押込、荷ハ引出而持参、家内［　　］先行イナヤ致候者ハ、切捨等致□□□強盗□受払、船も取られ候所、此船ハフランス船ヲ有□故、フランス方ニ而懸合ニ相成候由也、江戸表大店ハ、表かうし三通ニ囲ひ居、用向ハかうし（格子）の内ニ而弁□□明然此間ニ成、御触ハ□□見世ヲ開而、商ひ可致□事ニ而、少々ツ、明方致し商ひス、此節薩摩勢□所々乱妨荒而、諸国困り難義ス、大ニ諸人わくらん（惑乱）と申候、

江戸徳川将軍御囲物皆押取□□も焼払、大ニ荒し候故□□様も御逃、会津江仙台へ御入、関東より越□□□両国迄、何方ニ居候と云無訳、国々ヲ荒し候□□□防キ、江戸方ニ而ハ奥羽大将仙台様、早く攻登様ニと希居候由、然ニ、一説ニ徳川家七十万石ニ而□駿河之府中江儀居候様ニとの　勅命在之由、□併仙台ヲ朝敵と被相触、軍勢不引取、打□替り御征伐ヲ被為蒙様ニ成、当惑之事ニ而、一決候ニ被為成、　屋形様御配意不安御事也、西国方并諸御大名ヲ敵ニ御請被遊候様也、秋田・津軽も同様、南部様之事ハ、何レニ不分り、全体御身方（味方）ニ御血判迄被成置御約速と相聞居候事也、何様乱世ニハ、身方（味方）ハ敵

ニ成、敵ハ身方ニ成習也、
□□ハ尻戸前（尿前）口御堅岩手山様より、弐・三百人程も□置候所、御境ヲ越、向町辺へ押出居候処、上方勢押寄、戦ニ及候折、新庄戸沢勢後より切入、仙台勢両方より切込れ、挟打ニ而、大ニ敗軍ニ成、百五・六拾人戦死致候由相聞得候、
一上方銭相庭大下落、両ニ新せん拾八貫より廿貫文也、弥よわし、古大銭ハ廿四文之割、嘉永・安政、銭ハ軽目ニ而拾六文之割、新鉄大四文、右割合ニ而、大ニ勘定六ケ敷由也、小売物ハ皆積りニ而、売払金古小せんハ並四文之割、

一十九日、十方暮ハ十八日迄、然ニ今日昨夕より大雨、風、今日大嵐ニ成、併昼八ツ過晴ニ成、長く嵐不申候得共、作物江当り□何分不宜候年柄、天下之乱［　　］

一御上□□を以被仰渡［　　］より申来候、百［　　］農兵東山ニ而弐・三百人、早速ニ撰［　　］様被仰渡候由、甚迷惑之事ニ申来候、
一軍之事、当時追々色々説在之、書難尽候、
一長州并薩州御両所、大坂○持鴻の池・鹿島［　　］家より百万両拝借致由、

殊□六［　　］国ヲ引当ニ致、異国人より七百万両□□（借受カ）［　　］成候ニ付、甚□□□故、国々江乱妨スルト噂在之、大□□□□州ヲ悪ム、

一廿日より晴、廿一日白露と成、廿二日朝寒、日和、

上方不通用ニ付、御城下も不足、不自由之品在之、薬種類も、唐・和共ニ大上り之品多し、和物録凡高直、壱貫文銀弐拾匁ニ成、唐白蠟貫テ三百匁、広東人参ハ斤五百匁より、大黄・甘草ハ上り不申候、尤近頃沢山下直也、

廿三日朝白露、寒し、晴、曇り、過ル十九日嵐、存之外作物へ当り薄シ、此辺ハ六分通位ニも可相成哉、

一宗兵衛事、昨暮方帰宅、道中川支有、一日半程□引、所々窪地ハ中海道共ニ水不引、支る、併稲□□七分通と申候、畑物ハ随分宜作之由、

御城下ハ米直段下ル、歩ニ八升、白六升五合、

一前ニ印候新庄戸沢様、仙台へ御合体、降参被成置候所ニ、返忠とか、敵と成

候故、早速軍勢御手前より御指向られ、攻寄、御城江火ヲ懸、町家焼払、散々責打レ、落城ニ成、戸沢様相逃去候由、留り居者、百姓・町人ニ而も不残打殺と責□（掛カ）、追込散シ候由、忽落城ス、跡々秋田佐竹家江取懸候と相聞へ候、七月十二日より十四日迄三日之間也

一南之方戦ハ、未聢与不分、右之［　　］事也、先手より諸方へ御手配、若殿様ニハ相馬［　　］御城迄御出張被遊、惣御人数三万余人と相［　　］［　　］夥敷事也、依之糸方御買入御渡し金御指繰候所、糸方ハ御延引ニ成、宗兵衛事盆前より詰居、御城下御取集、糸方并唐人方へ御用在之、当時手伝唐人江も出会、御用□□急用ニ而一寸之下り、一両日居、又々登る候由相咄候、一御城下ニ而新金御吹方ニ成場所ハ、吹抜御門之内火薬も不足ニ相成候ニ付、御屋敷方縁下掻出、専ら煮方製ス、先御備之分ハ御残シ、御城下ノ御備ニ成、兵粮共ニ御城［　　］相成候由なり、諸方へ御米被相廻候事、御金入如山［　　］之御米ハ相応被為在、一方ハ御安心也、御金［　　］続キ、鶴岡并会津・米沢様抔より鉄炮御買入［　　］等、相馬様も右品御無心、金抔入、弐万両、三万両之金入来而御都合ニ成、唐人方より拾五万両、来月中旬糸金相渡候由也、

新金銀御吹方御用可成也

一御領内、金・銀・地金、女共かんさし等并金具等御買上相成候間、在合之者共村々吟味取集、為指出候様被仰渡候事、其外から金類地、金火鉢等、無用之品是又可指出候、□寺院釣鐘吟味調、同様為指登候様首尾被仰渡候事、

□農兵村々御調相成候、当村町ニ而町人、何も次男・三男ニ而五人程、村ニ而弐人、都合七人程相出候由、外無判之猟師共六・七人、是又被召遣候由、御調被仰付候事、朔日千厩へ出、御見抜ニ成、

一品替り御百姓、名字帯刀又名字御免、御知行頂戴之者共、此分者御軍用方御備ニ被仰渡候、追而御用之節、

及川弘平殿者近浜定詰相勤申度由願、是ハ浜方御備方御役方へ、ツテヲ以願、相弁候由也、

一生糸持合之分、家々何程之由、調書上被仰渡候ニ付、廿八日［　　］調書上候成、

一気［　　］其後日和ハ晴曇り続、雨無之候得共、残［　　］ニも無之、朝夕ハ尤冷、弥々秋冷ニ相成［　　］稲作共ニ不宜方、八百や物之類、なす抔弥々不足、追成無之高直也、

廿九日、当月ハ晦日也、日和宜、

一大［　　］宜、此品専ら用、此節（青菜）青な八文也、

一秋［　　］軍宮様御名代御附之御僧、南部へ御指向御相談ニ而、南部より［　　］此先ニ秋田佐竹より南部へ加勢ヲ被相頼、六百人程勢被遣候由、然ニ仙台組御人数并会津・米沢・鶴ヶ岡勢、秋田へ打向、横手か御別家之方より打つぶさんと責掛、合戦始候所、佐竹より大勢出陣、佐竹方ニ而南部之加勢、御城下へ頼置、既御留主居計置、殿様迄出陣被成、既虚城と成候ニ付、南部勢急ニ御城江押入、火を掛、焼立ニいたし、南部之勢一宇逃去候、依而秋田勢引返候ニ付、御別家之方忽チ落城ニ成、窪田之城如何ニ成候哉、続而責寄られ候ハヽ、落城難計容子成と申由、右ハ御城下欠取方、岩谷堂ニ而承参候由、昨夕ハ泊り相咄候、

切火ヲ懸候義、行違之由、不分り、

此段不分り

此南部勢ハ津軽江一手ニ而向裏切ニ無之候、違、

南部方ハ、佐竹江加勢ニ成、裏切ニ成、南部様ニも仙台方ニ□色々風唱ニ而、実事不分り、□者実成る、大ニ手柄也、津軽様ニハ此方へ御合体と聞、□残

りハ亀田様落城か、未夕容子不知候、新庄様ハ籠入たる有様、殿様始、御女中・御家内、不残生害と申候、佐竹様も案外之敗北成へし、仙府へノ早打、此間十余度参ル、

一南方白川、先キ当時無音、静成る之容子也、

然ニ、薩藩外西方勢そろ〳〵引取候由、噂ニ何分薩国甚困窮ニ成而、立続難キ容子ニ相聞候由、何れ打死・怪我人多く、敗軍之方と相聞得候、

西国方誠之武士ハ余慶無之、浪人・悪党之類多シと申候、此節奥羽も、味方ハ敵と成、敵ハ味方と成、大ニ御心配、併此両国ハ最早片付可申候□□庄之御蔵御開キ、残り居百姓共江、御囲ヒ米［　　］迄無年貢ニ被成下候由、仙台より被仰［　　］勢ニ而、落ス追々
噂ハ偽り多し

八月朔日［　　］曇り、雨気也、日切雨ふり、二日曇り、三日雨、東風、冷気、四日社日、此夜より［　　］日、此頃ハ引続残暑甚敷候へ共［　　］去年今ハ冷気ニ而残暑一向無之、曇り・雨勝、悉く不気候ニ而、病人多し、八百屋不足肴不足［　　］大漁と申候、下直ニ成、

五日、日かんニ成、昨夕より六日大雨、昼九晴、七日晴、曇り、八日□日弥冷気ニ成、
蚊帳ハ七月切、余ハ不用、惣而木・草・なり物不熟、至而不足、下り品物上方
ハ下直ニ成、当国方ハ軍事ニ付、道中不通用、海・陸共依而不足、高直也、

一蝋類不足ニ而、蝋燭・鬢付等困り候、砂糖同様ニ而、百文ニ五・六目位、貫テ
四拾匁以□段、上方ハ大ニ下直と申候、
一伊達辺、生糸者合戦最中ニも、百両位より百廿両位迄下落ス、御上ニ而少々
御買入ニ成由也、当時御領内中ハ糸取引無之候、未夕御上御買入不成候、
一此節軍事ハ、南ハ三春口（白川口）御堅メ、三春様ハ官軍へ合体ニ而、上方勢ヲ入ル、
依春口（三春）厳ノ御堅、細屋（細谷）ヲ御向ヶ可被成候旨、此御仁、敵方ニ而細からすと云、
敵人も恐候人也、
一奥方ハ、秋田佐竹家江、五ヶ国ニ而遠巻ニ責付ル由、［　］之落城以来、仙
府江入着住之御方、棚倉様御女中共と、岩城安藤様ハ、相馬より入、直々仙
府へ頼入、欠込候方小大名□三人程御借住被成故也、
殿様并御女中共ニ　雨中潜　二本松も同様、山城御女中方しよたれ御入、

十一日、日かんも今日迄、此間日和続、今朝曇り、昼晴、

秋田佐竹御家も、落城相成候由、昨日之便ニ承る、

南部も津軽も仙台へ御合対ニ可成仰候得者、出羽ハ平均ニ可相成也、南之方計り也、当時静之容子、江戸近辺ハ如何、不知、仁和寺宮様ハ、関東口軍事御差図将と聞得、駿河府中城ニ御滞陣之由、

一此間者、東山分三百人、農兵百姓前二男・三男、又者兼行跡荒々敷、農事等嫌ひ、あふれ居者共、千厩ニ而御見抜、白山堂的場辺ニ而、兵法、鉄炮稽古被仰付、小屋等掛り、米壱人分七合半積を以被下渡、日数十日ツ、修行、御代官様御見分ニ而、段々入替相成候、尚また御城下より師匠成御方被相下、稽古致させ候、気仙沼辺者、松崎御屋敷通ニ而致候由也、後ハ所々江、夫々御□□方ニ成、

南部様と［　］様と古より間悪く

一秋［　　］ハ南部方ハ御境為堅也、老若弱兵計り出置、仙□［　　］より軽津（津軽）ヲ、南部一手ニ而打申度、若不叶ニ者御加勢可被下由［　　］江抜人ニ而向由、勝敗未不知、

佐竹ニ而軍評定ニ、九條様随従之薩・長并鍋島・黒田・小笠原勢、此人数凡千人程也、佐竹と共ニ仙台ヲ打之吟味也、然ニ、黒田・鍋島・小笠原之衆中ハ同意せス、仙台ハ全朝敵ニ無之、打ト申義不同□訳ハ、九條殿并私共滞留中、大勢［　　］上出立ニハ路金等迄進られ、境之三□□相□無事ニ罷越候也、是敵戦スルノ義無之候、私共九條殿守護なし、奥方巡見［　　］致候ヘハ、御用相済也と而、此御方ハ松前江渡候、仍佐竹方ハ此利ニ承服して、仙台へ使者を以、手前江詫と相成候、然シ其仙より之使者ヲ切殺シ、約を反(背)キ候ニ付、屋形様御取受御承引無之、酒井・上杉・会津へ御註進被仰合、軍勢御指向、諸方より巻詰、責口順繰ニ責らる、八分通詰寄、

一当月六日より相馬合戦、八日ニ落城ス、此軍ニ而、当所之若旦那様、鉄炮ニ而手ヲ打抜レ、又御供千葉東太夫旦方之御子息、同ニ而打レ、即死ニ成由、十七歳昨十三日御飛脚為知相下り候事、髪元結等相下り十四日葬送ス、痛入候、

右合戦之義ハ、相馬公表向仙台へ合体之積ニ而、南方へ御手前勢と共ニ出張、堅之所、当方松山之勢近キニ居、為馳走と申而、毒酒ヲ拵ひ、遣呑せ、仍而松山勢六十人程死ス、皆大ニ驚キ、早打注進ニ成而、早速軍と成、相馬ハ裏切セント謀、依而直利(亘理)安房様御出陣ニ而、前と後より責懸、前ハ先備より打

而懸、火急之戦□セ相馬城打落シタル多ク相殺シ、逃落も在之、死人・怪我（落不申候）
多シ、御当方ニも五・六十人ケか（怪我）在之由也、此節三春城計り、近頃片付可申、（是ハ敵ニ早々落され）
同所も七月落城スと有、
一軍ニ成、出陣登り御家中、并其外共ニ、村町共餞別并諸ツナキ、又ハ無事安
全ニ而帰宅、諸願御祈祷参詣・夜籠り・通夜、色々様々ナリ、何レ一統痛候、

十五日日和宜、一日替り晴、（昨夕より）曇り、十六日夜より曇ル、今十六日庚申、大雨ふ
り、十七日・十八日曇り、十九日日和と成、此間ハ暖気昨夜□□頃、京ノ森米
蔵焼、十八日市　至而不立也、焼米先達より壱升四百文、（いもの□百三拾文迄少下ル）

一東山猟師共、先分百人組、御暇被下、無事ニ帰る、
仙台之陣中ハ［　　］丈夫ニ被下、酒共ニ度々被下、御飯ハ望次第四度宛
給ると申、諸方へ御□□□多く被相廻候、敵方ハ兵粮不続、□□く故、畑物
芋□掘喰ひ、百姓前迷惑ス、保呂羽登戸小野茂兵衛［　　］

十九日通日士ひ（侍）［　　］舟積へ舟ニ［　　］御堅メ［　　］仙付へ［　　］様方□同断、

一庄内藩本［　　］出□

［　　］仙之御［　　］

一徳

菊地喜代太郎、右［　　］士ひ方ニ而、足軽三人、是ハ為締之有［　　］送可申との御書付ニ而、肝入検断中［　　］御役人佐藤喜代治と有、

八月十七日ニ成右何様□□不分り

廿一日日和ニ成、昨夜大雨、昼より□り、永沢勇五郎様二度目、入谷村九蔵殿嫁ニ遣ス、

同日、当村鉄砲組、七月軍方へ被召登、帰宅ス、無難ニ而帰候、相馬ノ城落（人数御暇被下　清五郎殿）不申候、仙藩勢岩城之方へ出張之所、相馬も味方ニ而、同出勢ハ致候得共、何分二心、官軍へ内通シ而、両打ニ仙藩ヲ打之謀計也、依而推而不働、備而引取、其心当方之勢察シ、皆引取、御境駒峯ニ陣ス、是ニ而相馬勢と戦、双方

大ニ合戦、安房様御骨折と云、未タ勝敗不成□之所、御当方敵方へ一味合体之仁、大家ニ多シ、何時も□御手前勢敗北多シ、最初大年寺役僧、薩州より□手先へ廻シ入置候、僧者才智之人、此僧軍ニ成、則行衛□逃去、仙府之事一宇心得被成而、諸事ヲ敵方ニ而計、殊仙藩諸将諸士方不働、能く働く人少シ、細谷十太夫と言人、敵方ニ而細からすと唱而恐る由、三春も敵方［無之ニ　有之］関東御簾元、当方へ加勢之人々、仁義組とか言、仙藩之勢不働、へだ（下手）なるを笑居候由也、御当家ニ一人之能大将無之候而ハ、勝軍無心元由と、人々咄、

一敵方へ一味連判之由

御奉行但木様ニハ、軍場より御引戻ニ而、下屋敷へ番人被仰附置候処、此間逃去候ニ付、御城下表大騒キ、三好様ハ御在所之所へ□ル十七日かニ御召連と成、駕籠ニ而登さる、是ハ余迎り赤帯ニ□成候由也、御両人ハ御国一味之根本と申候、其外御大家ニ弐・三人、次五・六人相聞得、追々可相知候、右故ニ仙府至而危シ、誠以恐入たる謀事、不忠無申計候、　御国中ニも相馬口軍不止、両道中共ニ軍勢行戻り多、百姓前替取仕舞□家ニ不居、皆山中へ引籠、田畑共□掘ちらし、明家ニ入而煮焼シ、□勢ハ呑喰、依御触相廻ル、家主共内々

戻り居候様御首□相成候由、道中筋ハ握めし拵、表へ出置、飢だる人可召上と言方なり、

一此間南之方へ、為相手之か、鮎貝太郎平様被仰付、御登之由、右ハ敵方ニ而も指ヲ折恐ると言御人也、

着京ノ清五郎衆ハ、宮内竹三郎と言旦那ノ参謀役か陣取等ヲ御制道之□□ニ而懸廻り、然ニ下の者へ能く御手当在□折々金ヲ被下、酒肴等呑セられ、難有、能動而□□由、一頃御郡奉行ニ而、此御郡へ御下との御咄在由、

相馬裏切、軍ニハ早ク此御方御□とりニ而、一宇引取セ候故、敗軍・怪我人少シ、相馬方ニ而ハ、官軍ヲ所々の蔵々江入置、仙台勢皆死之謀計、右顕れ、軍戦ニ成也、藤五郎様と被申、大ニ合戦御骨折と言也、未タ勝負不成候、

廿二日より廿三日大曇り、不天気続而困り入候也、廿五日迄雨、不天気続、廿六日漸々晴ニ成、

一御家中熊谷逸見旦方之日記手帳ニ、

五万石
岩城安藤対馬守様、七月十四日為官軍之落城、仙府へ御入、
泉本田（本多）能登守様二万石、同落城、仙府へ御入、
下手渡一万石立花出雲守様、官軍へ一味之為、安藤様ニ落サレル、
五万石
三春秋田安房守様、未タ不落と言七月廿日ハ落サレ、仙府ニ御入
「元白川御城仙台へ御かし渡　二本松様も
棚倉阿部豊後守様十万石、七月廿五日落城御家内仙府御入、
湯長谷内藤長寿丸様、七月廿七日官軍ニ落サレ、仙府へ御入、
□（羽カ）州織田兵部少輔様、官軍早ク落城、仙府へ御入御家内中此節□台ニ而御セ話、
御本所へ御帰り被成由、三春相馬之戦、内通・裏□味方之為、夫々も大敗軍ニ而、死人・怪我人多く出候と在之候、
百五拾人程
当時仙府御入之御大小名方多く有之、大屋敷并ニ寺々御入替、明渡し、御用立、
御貸屋敷ニ成、町方大家へハ、御上より当座御宿被仰付、壱丁目日野屋抔ハ
大取込、米等者其外被相渡候而も、一日ニ金三拾両位ツ、懸と申候、其外之店々
も同し、御賄方被仰付、所々之御使者等宿屋也、

一南部様ニハ、如何様之訳か疑敷事在、裏切可有之候之事ニ而、又々遠野口、気仙在住（有住）江、御人数被相廻、今廿八日当御家中よりも拾四人出立、御堅め方へ出、

一今廿八日日和ニ成、此間ハ一［　　］而作取仕舞不成候、

嘉永五　屋形様［　　］当所御入馬乗御覧、十七年ニ成、近年ハ御乗也□□□此度軍ニ付、御武運為御長久之役［　　］ニ而、昨夕ヨリ寄合、精進［　　］不止如此精進［　　］見詰ニ候所、猟師之戻り□咄也□□鉄砲ハ間数三［　　］困り、敵方之砲ハ六百間□□在之由［　　］右之通敗軍多シと申候、双方古と違、甲冑無之□□鎗無之［　　］

一秋田横手合戦之御大名□□［　　］堅之所御□（所方）并酒井様（方勢）

八月十一日同［　　］入田村［　　］出陣ス、同所在大肝入大家在□最□、然ニ当所も仙之御領と相成候間、何成と御用被仰［　　］馳走申、

酒肴沢山ニ出シ扱、併敵方之謀計無覚□□含、士ひ方不呑、毒味致可申と指控居内、□方板木ヲ数打ツ、無程受ヲ打音聞ル、仍此方より□□之はん木なりと尋候ニ、各様御入、村方へ注進御用之為なりと答候得共、敵方相図可成と、一統備を立る、遠見之者走来り、敵方山野辺より大勢押出来ル由ヲ告る、直ニ此方よりも進而、則合戦と成、先陣一ノ関勢、続而御手前勢、庄内勢、其外、同十一日昼八ツ時頃より夜四ツ時頃迄、横手大合戦、味方大勝と成、敵方敗北、則落城ス、一ノ関方中ニも高名手柄在、殊ニ屋形様御名代と成而、一ノ関様岩ケ崎迄御出陣也、分取之品数々在、中ニも一之関方

□坂五郎左衛門手ハ、大将ノ首打取

菊地喜左衛門働キ打死　舛子辰之進

舛子重吉　大内山兵助　三人手負

同無難之者、高橋其外

分捕之品左ニ

一生首五ツ　一生捕三人　一袖印

一脇差三本　一刀　三本　一大小ニ而一腰

一鞍置馬弐疋　一馬印一流　一弁当袋壱
一削袖桐油壱　一紺木綿幕一張　一鉢金壱ツ
一弾薬拾弐箱　一守袋壱　一拾目筒一挺
一指籏一流　一胴巻壱ツ但金五両壱歩在
一胴着壱ツ金八両壱歩在　一大砲玉共壱挺
一箟　弐ツ　右ハ小四隊分捕也

〆

□□久保田ノ城責へ寄、未タ勝敗不成休、
然ニ瀬之上主膳様ニハ、先達白川合戦ニハ度々敗軍被成候所、秋田合戦江者大いニ御働キ、功有之由也、
当時白川表ハ、会津様御持、二本松城御手前勢持、会藩も加入、会津様所々御手繰、殊ニ御出陣、西方へ御留主ニ付、御願ニ而、当方より和泉田（泉田）志摩様、猪苗代江御貸人ニ而被遣、御堅ニ候所、御用御召有而、仙府へ御帰ノ跡、透ヲ見而、官軍更に押シ寄、責付られ、官軍賊徒会津方へ多く寄集り、切立候ニ付、仙府へ御加勢ヲ乞、又追々ニ諸軍勢被遣由、御城下表も暇無之候由、
然ニ会津様より御無心ニ付、和田様猪苗代之御城代と成、御手勢并仙府より

御付人御添、

一伊達梁川町大痛也、官軍賊徒等、近在之百姓ヲかたらい、此町江火ヲ懸焼立ル、宜暮柄之者へ、金子相出候ハ、不焼、助ケ候間、金子相出候様と申懸、無是非金子相出し、遁れニ成、右之振合を以、三拾万両程都合出可申との訳ニ被申懸、不得止事、吟味夫々相出候へとも、四方より火焼移り、梁川町一宇焼失相成候由、然ニ右者仙藩之者共致候間、右恨者仙府も焼つぶさんと憤り候所ニ、仙府より隠シ聞抜等被遣、右之者共召捕、御吟味相成候所、皆官軍賊徒等ナリ、皆仙府へ登セ候ニ付、梁川之者共大ニ相違致、後悔、仙府ヲ今更俄ニ尊敬致候由相咄候也、官賊共稲ヲかり取、畑物堀取、煮たり、焼たり、百姓家へ入、諸道具□シ出、自由ニ喰シ、後ニハ鍋釜等打コワシ抔致立去候事ニ而、誠盗賊之諸行、百姓方誠ニ難義之上ニ迷惑致候容子ニ相聞得候、御手前勢ハ右様之事無之、尤兵粮米所々江廻シ被懸、不自由無之由、

一八月廿日後ハ、白川口・相馬方共ニ、軍休也、　西方者北ノ方ニ有之、

一九月朔日日和、先月中ハ雨多、作物并軍場迄難義致候事也、当年ハ誠ニ以雨ニ困り候、

一当所之若旦那様ニハ、旦而働キ来候御事聞得無之候所、御家中奥山之四天王之誉□□若武者四人有之、一者

斎藤勇助旦方　皆川勘蔵　熊谷直衛旦方　逸見
御子息　権平　御□□　寅之進　御子息

片平鷹之進和光［　］四人也、軍中ニ大いニ能働と評判ス、何レモ

一薄衣和泉田（泉田）［　］会津様より御無心ニ而、同国猪苗代之御城代□間［　］構仕合之事也御家中ハあら〳〵登る

南ノ方軍事当分□□静成由、二日之夜［　］ニ而承候□

一糸方、未タフランス金持参之船不参ニ而、御上御金御入用多ニ而、糸買方不成、御約速、節角入船ヲ待、然ニ伊達糸并最上糸等不少仙府へ入着、異国人江交易ヲ［　］居候由也、下直之含、当地近辺も［　］待居、所々より手前へ引合申来ル、

九月三日昼より雨ニ成、四日朝寒しくれ、飯後晴ニ成、麦蒔最中、昼風寒也、五日朝大霜、晴、寒冷ノ催なり、

一南西方軍之事、不容易義ナリ、南方ハ江戸御城ニハ仁和寺宮様、大将薩ノ島津三郎殿と噂候、大将ニ而白川口、外中国勢、
浜手ノ方ニ、四条様岩城口也、西国・四国之勢□川様之勢も出張、黒田其外播州勢、海陸共ニ大軍、　西方ハ京方并加州勢、美濃勢、信濃、上州、北国勢也、かゝ様ニハ仙台へ御合体之様ニ聞へ候得共、表裏何共不分り、上方勢一同越後口へ大将ニ而御下向と聞得候、何レ歟実と言事不知時節也、何様北ノ方秋田も未不定、四方之大敵ニ而、御当家大難之御時節也、追々如何、此下々ニ而も大ニ奉案上候、
一御城下表、又以七万両御借上被仰付候由、当惑之事と申候、先達より他ノ御大名様方、御宿御賄方仕出被仰、店々分限次第割合ニ而差出居内也、岩城之殿様抔ハ上下千人位と申、外御大名三・四人、宮様岩沼迄御出張と申、然ニ又江戸御籏本組六百人程、船ニ而松島へ上り、御加勢ニ罷越候由、仙江御入着と相聞へ申候、御賄方□困り也、　店々も難続候間、表戸ヲ指候外無之容子、在々も追々右様□成、御城下衆此節金子無御座候間、在々得意貸御座候間、右御取都被成下度義申上候由也、
九月六日、村萩平ノ徳松木挽、六月廿五日立ニ而鉄炮組登り、今日無難ニ而

帰る、白川先、并東者相馬、先之堅メ官軍勢屯ニ而、通る事不成候ニ付、米沢ノ地より会津領ニ出、夫より伊達飯坂江出、白石へ抜而、仙府江戻る、陣中戦江も度々出、又々難義之時ヲ凌候由、生キ無難ニ而ハ帰る間敷と存候所、漸々達者ニ帰、安心之由也、

当時御嗣子様御事、白石御城御滞陣被遊、併近頃軍ハ御休ニ御見合、御評定内之由也、相馬・三春之両所落シ候ハヽ、近辺ニ御障りも在之間敷、少御手透ニ可相成と申候、併此辺毎日軍へ行人、往来不絶通ル、

一此節御城下表、近国之御諸士・落ウ人、大凡三万人程有之、此居そふろふ達御抱ニ御困□之由、仍御郡々々江も御割合可相成噂さ、

一御領内大肝入衆中、御指紙ニ而先日一統御登り、御用如何、右本役白石惣右衛門殿七月病死ニ付、永沢茂兵衛仮役之所、本役被仰付候由ニ而登ル、

変

一村々何事出来、一統江為注進之、所々板木ヲ立、右を打鳴シ為知候様ニと、一統江御首尾合ニ而、当所ハ赤坂并村江も相立候也、下町番屋之所ニ相建候、

九月九日日和、又曇り、十日朝小雪さら〳〵と、早くも初雪ふり申候、飯後晴

る、然ニ未タ麦蒔最中、稲も不刈、冬か来而、大ニ困候、当稲作何程之部付分量ニ相成候哉、不分ふしきニ米ニ相成候、

十二日夜大雨ニ而、嵐ニ成、弥々大嵐也、十三日朝晴、曇り、大風ニ成、暮方風止ム、十四日晴、曇り、しくれもよふ、

平治事も、宗兵衛［　　］十日立ニ而登仙ス、生糸御買方如何□□［　　］未無之、伊達糸下直、御買入之由、

同十四日、東山大［　　］方同役中津山直三郎殿御両人下り、手前ニ［　　］奥御郡大肝入中為登、　屋形様御目見被□□御意之事、御いり於御対面所ニ、大肝入ハ今日拾人罷出、御舞台近所ニ而御馳走被下置、誠以難有冥加至［　　］、然ニ被仰渡御用ハ、段々軍事ニ付、御金入多く、間ニ合兼候ニ付、南御郡者痛ニ而除キ、奥一統ニ而、金子拾万両御借上無之不叶義候条、何分骨折、調達差上候様との仰ヲ蒙り、下宿致候由御物語也、併此節郡々金無之、折外ニ致方□□座候間、生糸ニ而差上候様ニ御吟味、御首尾□□成由と相成候、右御答申上候而、御暇被下置、相下り候由□、　扨御城下表大ニ

御取込、軍之勝敗不分候、　御他領御客人、落ウ人御調七千弐三百人とか御帳へ印ニ成と被仰候、達者ニ而御用ニ立分ハ、夫々御遣ひニ成、老弱女子等御郡方へ御割付相成候由、未当村へハ不参、　御城下も別国之如シ、異国人之風俗之人計り多シ、大肝入御両人も、セ割の□結羽織ニ、仙台印白ノ細絹張付、軍場へ行如人之立付、□込ニ而被相下候也、南御郡ハ、誠ニ畑物并稲迄かり□られ候、皆官軍官賊と申候、痛入たる事共、奥方ハ誠ニ静謐ニ而暮候方、大ニ閑也、御貸上等之諸上納ニ苦く候得共、南軍場近村江競へ候而ハ、至而心易シ、大家も潰(潰)され、痛入候次第なし、大肝入衆中も大ニ勘弁ニ而御下り也、先達より、水沢ニ而御郡奉行様御下り、村々の農兵集ヲられ、軍事教られ候由也、

古の軍と違、弓・鎗も不足不用、　馬も無、歩立也、

十五日、昨夜雨、今日晴而大風、不天気多ニ而、麦蒔後レ、何方村も六・七分通仕付、

一大肝入殿ニも、糸方ニ而十六日より村々御廻村、当所へ十七日御泊りニ而、手前縁家旁ニ而御宿致候、然ニ生糸御調ニ相成、夫々御味吟(ママ)ニ候所、他国売留被

置候得共、御買方未タニ無之、村々小前金代ニ行当候間、段々商人売ニ相成候故、至而不足、大ニ御見詰行違、御疑心有之候得共、全体今年之蚕作、近頃ニ無之違作ニ而、半作ニハ不出、四分位ニも可相成所、目方落ニ而尚又不足と申候、釘子より津谷川、保ロ羽（保呂羽）、大籠ニ而三箇半位之書上ニ成由、当村ハ調書不出、町方へ当年商人中もまゆ買入候家も無之、追々売、御城下為登ニ相成、壱箇位も漸々と申候、御買直段ハ、現売より壱箇ニ而廿五両上高買入、当分御借受ニ而、十月中御貸上金出金ニ而、糸代御払被下候由也、未タ本調書上不出ニ、大肝入殿御出立、御廻村ニ成、何分小前之含ニ者、御延金可相成との疑ひニ而、糸出高ハ尚不足ニ可在之との事也、跡追ニ出シ売候様ニ而不成との御談シなり、何様上下五段之位有、此辺ハ上弐百五六拾両・七十五両迄御借上故高直也、小前ニ而ハ下直ニ而も、商人より現金之方相望居候也、

十八日暖気、昨夜小雨ふり、今日晴、天気不定、一日替也、御代官様御田地見、今日御廻村也、

一前書之通、御貸上金此度分、東山両扱江八千五拾両とやら、御割合相成由、人頭ハ聢与不知、凡六千人近、面付ニ而ハさツと金七切位ツ、、併高人頭と割、又持高無之、宜暮者へ、分限等御割ニも可相成容子也、此度分ニ而、当年三ヶ度之御用金被仰付、誠ニ上納成兼候者有之候、先々之分未タニ上納済不相成、村々役付衆中大ゐニ困り居候得共、村々金銀札等迄も、諸通用ニ一円無之、町々不盛ニ而、一統銭迄も無之、見世店も売代金聊小遣ニ間ニ合不申候、□以前世無類の困窮と相成風、上納物計り□重り、致方無之風情と相成候、田畑之物より外ニ□ニ致候事無之世ニ相成候、御上様ニも御当惑也、

□吹方之金者、地金不足ニ而、一日ニ百両・弐百両之金外不出、間ニ合不申由也、

廿一日、宗兵衛より御城下出手紙下ル、糸方何角と御金入多ニ而、御買方之義埒明不申、不分り、困り入候、近日帰宅之由申来ル、軍談方品々在之、追而印可申候、

一所々落人、御城下大凡一万六千人程御調ニ而、奥方へ御割合被相［　］千厩着、南方廿壱ヶ村へ百八拾人之割［　］時大光寺へ入、村割諸品当村へ夜着ふとん、膳わん共ニ廿五人前、内夜着四ツ、手前へ壱ツ相出候、外諸色

惣割ニ吟味成、当郡へ者、越後ノ長岡家中之由、同所之殿様ハ、牧野備前守様七万四千石と相見得候、

九月廿五日、当町泊り士ひ六拾人程御先触ニ而、廿六日弐百七拾人狼川原立、当町昼、手前へ拾人割合、右名前平岡豊次郎、脇野喜佐八、内藤丈三郎、鈴木磨内、小山新蔵、我妻保三太、牛込染吉、須佐友八、小林□弥、桑原益之助、〆拾人、右之通宜敷所、丁割合大込也、右之人足百人程、馬籠・安駄等、老弱□子在、荷付馬等継立、千厩町へ送、大原へも通る、東山へ三百人余と相聞へ候、

右賄之義、御上より米壱人分・七合半、但握飯迄御見詰、菜物諸色代弐百五拾文ツ、被下候御首合（首尾合）之由也、追而右人数村々江御割合、当所へ三拾人程被渡候由也、

手前へ休候士方ハ、相応之人物也、何様道中泊り〳〵ハ大人数ニ而、宿々迷惑致候由也、

フランスノ蝋炮（ママ）貰ひ候所、誠ニ結構、手キレイ成細工、日本之品不及、宜、

晦日、又々長岡家中三拾人、御城下より御小人持ニ而□□当村へ割渡され、藤勢寺へ入、男・女子迄、黄海村へも三拾人渡され候、何様当郡三百人余と

相聞得候、又々当村へ八・九人追割来る、

十月朔日、昨夜より雨、夜分ハ大風、寒暖揉る、天気不定、気候不同也、大根盗人多ニ而、先達より大根つミの所多シ、至而早也、山々雪ニ成、

一牛房・にんちんハ、壱把七拾文位、小把也、

一砂糖者、白百文ニ六目、黒八目位、
金壱歩ニ弐百目

右之割合ニ而、弥諸品高直、

一日手間日用三百五拾文也、

一糸綿高直、五百文ニ拾五目、但一朱之代六百文也

一上手拭五百廿文と成　清酒一升八百文

〆

此間者、長岡藩落人・怪我人、安駄ニ而八・九人来り、又入替等有之、諸人足多く遣わる、藤勢寺三拾六・七人也、

四日・五日日和、六日雨、暖気也、

一御城下も四条様御入来之由、何角と御取込、

京御勅書　伊達遠江様江被下
御書付写左ニ
宇和島侍従江

同性伊達慶邦義、東国之大藩、殊ニ祖先之勤労も有之義ニ付、当春同藩一手ヲ以、会津征討之任被仰付候程之事ニ而、深ク御依頼被遊候、就而ハ右旨趣速ニ奉命、一旦及出馬候処、豈図ヤ賊ニ党与シ、軍機遷延セシメ、加之督府ヲ軽蔑し、参謀闇殺等之所業、其罪難被指置候得共　朝廷至仁好生之、思召ヲ以、或ハ姦臣国命ヲ執候而之儀ニも可有之哉、篤ト御検覈可被仰付候ニ付、一先寛典之御含有之候処、更ニ悔悟之体無之、弥逆意ヲ逞シ、屡官軍ニ抗シ、剰エ当節領内於白石、会社ヲ結ヒ、盟主与唱候始末、罪魁不可遁、畢竟慶邦反覆ニ至り、一層賊焔ヲ煽動シ　上者奉悩　宸襟、下ハ万民塗炭苦ヲ釀シ、遂ニ六師大挙ニ及ヒ、大方之艱難立至候段、全ク　天意ニ背キ、人道ニ戻り、大逆不可謂完(最早)奉典刑ニ、於難被赦、依之被止官位討伐被　仰出候、此旨其藩ヨリ□申達旨御沙汰之事、

辰八月

右御書を以、遠江様より御到来之由、驚入奉候御事也、御手前之御吟味と者、大ゐニ相違相成候、

一屋形様御事、亀岡新御殿江御引［　］隠居ニ被為成、御慎ミ、仍而御［　］所へ当十月三日御触在之、若殿様御事□賢堂江御引移り被遊候由也、

四条様御事、近日御城下へ御入着之由、当節者官軍追々入来り、出口入口御番所へ出張、入替ニ相成候風ニ而、国者大ニ当惑、出入六ツ敷、何分町中取仕舞、大町も表店々戸を指、内之取引ニ成、国分町宿屋中も、表戸指、渡世至而縮、休ミ成、御城下も他国者多ニ成、既ニ□□（落城カ）之風、サビシク相成候由、以之外痛入［　］大事ニ成、追々如何、

一当村藤勢寺落人方□賄品割合、壱軒ニ付壱ヶ月味噌百目、大こん三本ツ、、薪木壱丸ツ、為相出候事、外ニ夜着、ふとんのわり合在、米者壱人分一日ニ七合半ツ、　御上より被相渡候、村々も諸人足、当村ハ毎日人足弐人、組頭壱人ツ、詰ル、多用ニ而人々困り候、尚金銀一切無之通用、并上納等致兼、悉く迷惑ニ成、

右之通、前ニ写候通、御城下表一旦落城之体ニ見得下々諸人歎敷取騒キ一宇取仕舞ニ至候得共、全ク左ニ不有、異人フランス・イキレス等之諸将ハ、徳川家并仙台侯ハ、国人も誠ニ仁義之国風ナリト賞翫ス、何卒味方ヲ致し、両国ヲ建と、壱万人か勢相談在之、殊ニ御国方ニ赤組と追々唱候御士ひ、凡千弐百人程在、其外ニも一組、能軍調練シタル組在而、合戦ヲ好而、此後我等敵何人在共、不恐と進、既ニ推出候処江、其外然ル所へ徳川家之御人数六千人程味方と成、細川様并伊達遠江様等御和談ニ成、軍方御指扣ニ成、御休ミ品々御吟味在、四条様御事ハ、彼是仙府之容子為御見聞之、一寸御入之儀候由ニ相聞得候、御上ニ而ハ、御城中ノ御宝物并武具等迄、一宇何方へか御取移、空城ニ而、屋形様御移被遊、軍取鎮メ旁ニ而

昨七日宗兵衛事下着ニ而相咄候、御城下表川原町より始、他国人之宿割、北ノ二日町迄、大町より新伝馬丁迄、肴町・立町、入木町、本丁通不残、家毎ニ拾人・廿人、家次第わり付之御宿也、凡他国人三万人余と申候、

右御和睦ニ相成候ニ付、官軍勢追々と来而止宿、往来ス、京より大乗官と申御役被相下、是ニ而諸指行下知被相伝へ、細川公又ハ遠江様とも申候、依之御城下も当時静ニ成、店々見世等も、過ル三日より開キ、商ひ致候、然ニ官

勢之者、店々ニ而弐・三ヶ所、足袋抔望、十一文と言品、大セん拾壱文置持参之者、又ハ仙札壱歩在ヲ以、金壱歩書付之通抔と申払候、不都合之事共在之ニ付、大乗官より厳敷制シ、戒候ニ付、其後ハ大ゐニ長ヶ敷相成候由、併薩藩之士ハ、至而あらく敷候由、人々往来も此節宜相成候、徳川家ノ味方と申者七百人計居候所、石之巻江下り、同所滞留ス、何分官軍も江戸組も、皆兵粮米ニ詰り、仙府へ来而、当分之居候と成、馴共仙台ニ而ハ弐万・三万之人ハ□苦、米ハ十分成と被相咄候由也、異人方并□戸勢等江、一万石已上米被遣候由相聞得候、

仙府御諸士ハ、七分通ハ合戦ヲ好、三分通リハ不好と言、追々如何、

一生糸方、京方より異人共江取組、交易致事不宜由、大丞官より仰在之ニ付、糸方御役人御呵ニ成而、御行ひ相止ム、別而町人江御任、肴町三品問屋鎌田屋五郎兵衛ニ成、江戸・横浜商人と取組ニ相成候、御国方一手買方之由也、

一御国方、是迄之軍御勝利無之と、諸将ノ内ニ謀反、敵方へ内通之人五・六人、外□□とも不少在故ニ、全くの御勝利無之、敗軍多シ、依而如此、　屋形様ニも、夫故大ニ御苦痛被遊、此節ハ御老耄之体ニ被為成、御隠居被遊候由、全ク

御尤之御事也、

一江戸米相庭之事、金壱歩ニ小升ニ而一升也、
壱俵金四十八両と申候、

右之通高直ニ而、川橋々より落死スル者多シと申候、以前之様ニ国々より米不登、大石之御□□方より不登、如此、米穀類不足ニ而、難暮故、貧人ハ水死ス、

白米歩ニ七升也

一仙府者、御蔵米壱俵金六切位、

下海道、九升より壱斗位、大凡作毛ハ七・八分、

当郡者、六分七八、七分位と相聞得候、

当町直段、六升より五合位、

大ツ出秋ニ成、存之外取る、六貫文ニ成、

大こん壱駄ハ、壱貫文より壱貫弐百文、

此節穀物ニ不限、小盗人多シ、

大川通り水損ニ而、大ツ、大こん共ニ不足、薄衣町大こん壱駄弐貫文位、

此辺日手間、女ニ而も三百文、日用□セん共ニ不足、銭取れす故、頼者も少シ、
□作方も手前人ニ而専ら働く、
市日ニ而も、一円と申様人相立不申候、三十年・四十年先とハ、如別国之、
大違也、
一銭も、弐貫四百文相庭ニ而ハ、両代替金切替出来不申候、余リ下直也、弐貫
三百文ニ而も進不申候、追々上り可申候、

十月九日夜雪、尤寒シ、十日小雪ふり、十一日夜小雪、小雪ニ候得共大ニ寒く成、
秋日和無之、麦蒔遅く、当節生出る計り之所多シ、例年より寒サ早シ、

九月より
一繰わたも上り、御城下ニ而金壱歩ニ九拾目ニ成、

十二日平治帰宅、糸買方弥々取組、糸方御役人手柄庄左衛門様御家来同道ニ
而帰る、御城下御受人鎌田屋五郎兵衛殿持ニ成、新伝馬丁白鳥屋利助殿、御
役人様方へ至而不宜、悪口致、被相除、仍而鎌田屋ニ成、御上より為御呵之、
是ハ官軍方将役大丞官江為御申分之ナリ、一通庄左衛門様御牢入ニ成而、其

日ノ夜ニ牢より揚り、隠れ居、仍而糸行方一円御上ニ而無御構と成也、馴共御内分ニ而ハ、夫々庄左衛門様御指図有而、横浜商人江御取組御セ話成候、右ニ付鎌田屋通帳を以、手前ニ而買方、横浜商人奥州屋之方へ売払渡ニ成、諸事為引合之、段々手前へ下る、

為右取組之、平治事も、宗兵衛と替り〳〵春中より秋中御城下滞留、御役御屋敷へ出入、数月懸リ、漸々十二日帰る、御上ニハ軍中ニ而、諸事御事多、又ハ糸方御吟味色々有、受人も替り候故、大ニ延引、骨折致候事噂、

時代ニヨリ将軍ノ下役官領也、又ハ執権、

然ニ御上之方、大丞官ノ御役ハ、京勅命を兼候ニ付、右之御役号也、西国ノ細川越中守様、御添役ニ伊達遠江守様、御両所様仙府へ御入被遊候而、屋形様へ御対談被成置候、御国方ニハ、何程御骨折、合戦被成候而も、御勝利無之事御座候間、軍ハ可被相止と有、品ハ御家中ニ謀反之者□有之、面付等懐中仕候有而、名前八人有、其外ニも□□由、是ハ京ニ而写取候由御談シ、殿様驚入□疾より承知致し居、御挨拶、仍而御和睦之事調へ候、全体屋形様ニも不及是悲(是非)、先達とかと　京都江　御上書為御登ニ、降伏謝罪被　仰上候

由、御咄被遊候、　其品々御談御登リ、御帰リ、右御和談済而、四条様十月三日仙府へ御入被遊、煙り留ニ而御出迎ひ、皆御案内、礼服上下ニ而出候而、先達而中屋形様御城外亀岡御殿へ御引籠り、御慎ミ有セられ候所、屋形様ニも先ニ御城へ被為入、御出向被遊、御物語り被遊候所、四条様御咄ニ、左程ニ無之候而も宜御座候由也、御談シナリと聞ゆ、軍事不止ニ付、為鎮之罷下リ候由御談、仍而九条様等ハ、未夕御登リも無之、秋田辺へ御滞留か、全体ニ軍乱可鎮之所ニ、却而其旁ハ乱ヲ増様成風聞、京より御呵可有と言、

一御当方より、京へ節角為御登之御上書、道中堅められ、御書届き不申候所、壱人誠忠之人有、他人之供ノ人と身ヲヤツシ、登而近衛様へ差上、朝庭（朝廷）江上候、漸々奥方　殿方様之御本意相達候由ニ聞へ、四条様御入之前より御和談済ニ付、官軍勢一□余人段々来り候ニ付、万一町家焼も難計と、町家騒ニ而取仕舞、五、六日ハ戸ヲメ、女・童子ハ皆近在へ引退、一円物売無之、痛入たる候有様成ニ仍而、　御上より御触、一ウ戸ヲ開、商ひ致不苦由ニ付、如元之ニ成、

四条様御事、三日程御滞留、直々御登へ馴共、官軍共四方へ通り、国中之様子見物等致候風ニ而、未夕御城下も人多ニ而取込也、　江戸御旗元勢数百人、

是も官軍へ隠レ、諸方ニ居、石之巻より遠島之方ニ居、江戸勢之大将ハ、春日左衛門（軍七十度戦）と言強将也、関東一人と言人也と言、仙藩ニ而細屋（細谷）十太夫と言人、官軍も恐ると申候、三十七度戦、此両人ハ、数度之戦ニ、手勢五・六人外損せすと申候、細屋ハ手勢弐百五六拾人在、大丈夫之人也、数年国廻候而、諸事委し、フランス異人中、西国方へハ鉄炮も薬も不売、右両品、玉共、人数一万人を以相添、仙台へ御味方致候と言、乍併御和睦相成上ハ、軍ハ被相止、乍去京より何様御勅命来候哉、御咎め難計と、御扣、

□此間御当家江、於伊達之内拾五万石之□加増被下置との義被仰渡由、又相馬様ハ□心ニ而、約ヲ変シ、甚非興（卑怯カ）之事ニ付、五万石被召上、壱万八千石と相成候由噂有之候、大後悔也、

併御手前之御物入ハ、拾五万石、廿万石之御加増ニ而ハ御間ニ合不申との御費ひなり、此頃も徳川勢へ、一万五千俵被遣候由也、官軍見而、何方へ遣米也と問、御挨拶ニハ、徳川家より預り之石相渡遣候也と御答也、米ハ御国ニ沢山、丈夫ニ御持合也と言、

一其後十二日か、徳川勢石之巻より廻り、気仙沼へ着船して、七百人程、此内当方之士も在之由、上り市中へ罷越、間飯を望ム、仍而家々ニ而めしを握ニ

して指出、船中江も入、三日程滞留致し、南部ニ而津軽ヲ責打と聞候間、同所へ加勢ニ罷越候由、咄ニ候所、諸払相立出立、出船、何方へ参候哉、不分り、格別之損痛ニ不成と申候、

御城下ハ、先以静謐ニ相成候由也、

一一ノ関様御事も、御本家御同様、御官位被相除、右京と計り唱候由被仰渡候事ニ相聞得候、　御両家様共ニ追々如何、困り入候次第也

一仙藩謀反組之御方八人、御一同門様方へ御預りニ成、　別紙在、　御上之御事より、右科人之御方等之事共、写書ハ別紙ニ写置候、

一当分御国之儀、京都へ被召上候様成御事ニ而、　屋形様も亀岡御殿ニ御慎ニ被為在、御嗣子様ニ(安房)も天章様御屋敷等ニ被為在候由、　片倉様御屋敷始、登米、水沢様御屋敷等明渡、京方之御宿ニ相成候由也、当分之御政事ハ、四条様御指図ニ而□元重役中へ預ヶ置候間、何分国家之政事大切可相納候段、被仰渡候由也、誠以痛入候次第、御大変成事、是ニ而大ニ御失作(失策)と成　御威光薄ク相成候、歎敷御事也、大ニ御了簡・御吟味違ニ相成候、

一此節之諸相庭、米作ハ此辺六分位之取入納ニ成、常年ニ而ハ大ニ可騒大不作ニ候得共、人々高直ニも不恐、薄衣并水かむり之所ハ誠ニ皆無之稲と申、栗、

亘理ノ阿波様方ニ為入ニ而

したみ、とち抔、山かて専ら取方、乍併南・中奥ハ、東より宜候由、何分金無之、望米此節大ニ下直、壱斗四・五升より古壱斗一弐升、此辺新一斗位、古七升よりなけ(投げ)売八升位迄、金無之故、又買人も無之、切手取引計、

一濁酒八升ニ下ル、糀ハ三百廿文と申、

大ツハ六貫文、米ハ金之為ニ下る、

一先日中御城下ニ而、古ノ大根漬壱本弐百文位、此節当地ニ而落人より望れ、壱本四・五拾文之由、大小ニよりてなり、

十七日庚申、天気無事、今廿日暖気、小雨在、手前稲こキ(扱)も仕舞、百束より六拾升程出ル、当年ハしゐな無之、吹飛ぬか(糠)計り多し、去々年よりハ少々宜、取続六ッ敷也、何様凶作同様、諸賄在・町共ニ、麁飯品々能拵候、

一米者不作ニ而も、金銭入用之為ニ、当時下直、

一大豆者出秋、右同様ニ而、賄ニ不成故、下直、

品悪く
はつ豆多し六貫文より五貫五百文と成

□そば者、賄ニ成故、売人不足ニ而高シ、八貫(ママ)貫文位

□とふふ　拾八文ニ下る　こんにやく廿弐文

一濁酒　八拾文

一塩不足ニ而、気仙沼ニ而弐斗入五貫文位、

当夏中不天気故、塩仕出不足、兼而用心扣、不天気の年、夏ハ専ら之品、仕出不足ニ成也、

一糸綿手札ニ而拾五目　近年綿大ニ売る、

一白並切一尺弐百文位、

一莢(真)ハ下直ニ成、

十月廿八日風也、此間ハ天気続、雪一向無之候、

一御上行之生糸も被相止、前々印肴町鎌田屋望人、横浜奥州屋取組惣(カ)宿被相頼、客人過ル廿五日三人下着、滞留買方手配ニ候所、当郡御代官様通帳御首尾合御猶予、御郡方御貸上糸、未納切ニ不相成、四・五日為夫此方買方延引ス、然ニ此節所々へ手を廻シ、糸相応買抜かれ候、真綿も買人無之、上弐百目ニ買われ候所、せり込、此頃ハ上百六拾目位迄、大ニ上る、

手前之客人、糸・真綿共ニ買入候所、生糸先月、当月初頃ハ買人無之、

百五・六十両位ニ出来候所、当方江買人下ると聞、商人中先へ廻り而、買入ニ成、跡ハ売、人気強く成、買置之者計りニ成、当方之買、大切之場ヲ遁ス、仍而買人六ッ敷、休同様也、　　異人江密々売候故、追々買人多く入込、

十一月朔日日和也、此間諸事不書、　　御城下表之事共ハ、別紙ニ写置候、

此間晴、曇り、折々さら〳〵小雪、四日昨夕小雪、夜中雨ニ成、又雪少、近頃冬至ニ成、寒気ゆる〳〵敷く、七日大風、併暖気なり、

昨六日、生糸納高不足ニ付、大急御状下り、□肝入殿又々出張、当町御吟味、三箇程出る、余村共ニ御吟味、廿箇程不足分御借上ニ成、

右ニ付而も、御郡々へ、やかま敷御小人等相廻候間、密々之買人も止、休ニ成、手前客人も直段高直、不引合ニ付買方止、尤御通帳之諸首尾合も当分出来兼候ニ付、荷出も不成、滞留ス、

一藤勢寺之落士達五・六人出立候所、又々外より六人程足入候、

一八日冬至ニ成、夜五ッ暖気也、九日朝より小雪、冬至ニ者余り暖気、近年如

此不宜候、冬之気夏にさわり候、今日雪ニ相成候間、跡寒気を祈る所也、一円雨・雪無之、冬日照と成、専ら雪ヲ望、

一米者、八升壱歩ト申候、

去年之冬至も暖気ニ而、雪一切無之、如春之と在、当冬同様なり、不面白候、追々如何、

一糸買方取組ニ付、夏中より平治・宗兵衛、御城下滞留、漸々取組ニ相成候得共、十分買方ニも不相成、止、大ゐニ当時損金ニ成、乱者折節、

写

御曹司様、総督府江御沙汰、此月并今廿八日八ツ時、御供揃ニ而中村城江相馬被遊御登城、四条殿江御拝謁之上、今般態々軍門降伏、謝罪趣意承届、委細参謀を以別而申出候通ニ候処、近頃過激徒蜂起致、天朝軽蔑、不用国命、及革動、国家存亡不顧、不軽罪科、仕舞次第国許へ罷帰り、父子尽力、鎮撫致候様可相心得、若此上国中不穏之節者、重罪科被為及候間、御沙汰之趣も御全生之

御沙汰□仰出、八ツ時無滞御旅宿江御帰被成置、益御機嫌克被遊御座、右ニ付今六ツ時御供揃ニ而被遊御帰国、此旨各承知、　屋形様御始可申上候、恐惶謹言、

九月廿二日

石田光之丞

遠藤文七郎

又

宇和島侍従江

同姓伊達慶邦儀、東国三大藩、殊ニ祖先之勤労在之儀ニ付、当春同藩一手を以、会津征伐之任被　仰付候程之事ニ而、深ク御依頼被遊候、就而者右御趣意、速ニ奉命、一旦及出馬候処、豈図哉、賊徒江党与シ、軍機遷延、加之督府を軽蔑、参謀暗殺之所業、其罪難指置候得共、偏ニ　朝庭主仕好事之忠命を以、或者姦臣国命執す儀ニも可有之哉、篤与御検敭被仰付、一先寛典之御含被為在候処、更悔悟之体無之、弥逆意起、屢官軍抗、剰当春領内於由石、会社結、自盟主ト唱候始末、罪魁不可遁、畢竟慶邦反覆至候、一層賊焔煽動シ候上者、

奉　宸襟悩、下方民塗炭之苦醸、遂ニ六門大挙ニ及、土方艱難立至候段、全
　天意ニ背、人道戻、大逆不可謂、最早於典刑難為救、依之止官位討伐被仰
出候、此旨其藩より可申通候様御沙汰之事、

右之御文ハ先日前ニ写候御事也、二重ニ成候、

降伏謝罪御嘆願

臣慶邦、恐惶頓首、泣血奉嘆願候、今般会津御征伐之砌、名分於順逆誤、於
出馬先、家来共抗官軍、奉悩　宸襟候段、恐惶至極、臣子之分不相立、先非
後悔、今更何共可申上様も無御座次第、臣乍両背（不肖）、素より奉抗敵　朝庭江候
存慮ハ毛頭無御座候得共、全遠境、隔絶（カク）之僻土ニ罷在、責（春）来天下之事情形勢
も一々承知不仕、多恐、厚　叡慮之旨具ニ不奉伺、遂ニ右様之事件立至、畢
竟臣兼而指揮不行届より之所（所置）為ニ而、心得（如何）ニも重々恐入候次第ニ付、此上者本
陣〇ニ罷在候も、甚奉恐入候間、速ニ城外ニ退去、張隊長参謀臣之厳所謹慎
申付、奉仰朝裁、闔藩、誓天地勤国之外、他志無御座候、就而ハ同盟ト□藩
江も、早速降伏謝罪可仕候様説、後尽力罷在候而、悔悟謝罪之藩、一同御寛
典之御所置被成下候様、冒万死偏ニ奉嘆願候、誠恐々々謹言、

九月　藤原慶邦

又　伊達陸奥江

今般降伏之嘆願書印、落手ニ相成候上ハ、城地并器財・弾薬、御先鋒江差出、謝罪之実効可相顕旨　御沙汰之事、

但シ、徳川脱臣之義も、去十六日御達面之通、早々仕置可有之事、

九月

仙台藩

徳川脱走之家来、其藩江依頼罷在候者共、屡脱官軍ニ候、其罪不軽候得共、真ニ先非後悔之上ハ、出格之御計を以、死罪一等被免候条、其心得ヲ以鎮定可致之命候事、

九月

伊達陸奥重役之者共江

領分民政之儀、追而御沙汰可有之迄者、重役之者乍慎取締可致段御達有之候事、

九月

伊達陸奥
重役江

仙台城、其方共江当分御預りニ相成候条、厳重ニ守衛可致旨　御達有之候事、

九月　　参謀

御直書写

先般会津郷兵援於白川紛抜(援)之間、不弁是悲抗　官軍候より遂ニ不改徹今日之勢ニ立至候所、倩考へ候得者、其節之見込違より君臣名分ヲ誤候ニ付、従天朝深蒙御不審、殊ニ今般宇和島侍従江之勅書伝達在之、昨日拝見為致候通ニ候処、誠以無拠、恐入候次第、今更悔悟仕合、無他事、速ニ兵隊を懲し候上、伊達将監・遠藤文七郎を為使者相馬へ、総督府江謝罪歎願書指出し、城外ニ謹慎罷在心得ニ候、就而ハ万一心得違之者、儀論沸膽(議論)、軽挙妄動之所為等有

之候而ハ、　天朝此上罪誤難免、尤国家之大害お醸、大ニ予志ニ懐候間、大小之諸臣篤与相弁ヒ、謹慎意貫徹候様、一統厚可相心得者也、

九月

此度御城外ニ被遊御謹慎候儀ハ、被　仰出候通ニ付而ハ、御家中士・凡・倍臣等迄、何も謹慎罷在、軽率之儀等無之様可仕候、

一御家中士・凡・倍臣共ニ、月代剃り申間敷候、

一普請、鳴物、三器暗入共、被相止候、

一御家中士・凡・倍臣共々、常々戎服着用仕候儀者、可相扣候、

但、早速改兼候者者、当分着用不苦候、肩印者取候て可相用候、

右之通被仰出候間、御城下・在々共ニ、如兼而之早速可被相触候、以上、

九月十四日　　主税

正親

孫兵衛

外記

孫三郎

御目附中

慶応四年
九月

四條殿、十月六日八ツ時　御城入、御着到ニ候

門札　　将監殿屋敷

大政官
会計会謀所
同　　小十郎殿屋敷

参謀宿陣

病流

屋形様亀ケ岡御殿

御謹慎被遊候事、

御奉行衆

石田幸之丞殿　光（ミツ）と在之

後藤孫兵衛殿
大條孫三郎殿
遠藤文七郎殿
遠藤吉郎左衛門殿

御役御免

中嶋　大町
大内　石母田
御預りニ相成衆
但々木　岩手山江　一　子息　岩谷堂
瀬ノ上　角田　下屋敷　一　松本　切腹
子息ハ松山へ

坂者　黒沢へ　三好様ニハ早く切腹被成候、
外ニ　行衛不知と申候　外大柴田様も被登候由、
真田　松倉　大越
此三人御吟味中御〆り
岡慶助と言儒者、是も御登ニ成、国分氏ハ岡ニ師也、

右之御方、京都へ被召登、御仕置相成候と申、不忠之者共都江被相登候由、大丞官より之仰也、

当地ノ国分玄秋、和光師之付人ニ成而、序ニ京学ニ行、細屋十太夫様御前へ御暇乞而、立退候処、被申候旨、小野町辺ニ而、官軍ニ被押留、被召登候由、是ハ　御上へ忠之人、無科候得共、戦場之意趣ニ而も被召捕候哉と言、

右之外謀反組之人々、何人御召捕ニ可相成哉不分り、今最中御詮義、殊ニ又御国中之事共、并米穀三十万石、京都へ可被相登由、大丞官より被仰談、此方御奉行様方大ニ迷惑、何角と御欠合被成置候、御吟味中、何様御奉行様方至而よわく、傍ニ而もかい〳〵敷、西国方御大名様方多く御来臨ニ而、大国之家老奉行ニハ至而弱しと笑われ候由、殊ニ御手前様へ御贔きの細川様、遠江様、浅野様抔、扨々歎ヶ敷、御気之毒ニ被仰候由、何もかも自由御勝手悉く被致候由、尤　屋形様御事も、御上洛可被成置由ニ被仰渡候由、此節国中官軍往来シ而、　御上之鉄炮大小共ニ取上、御一門様方并御大家之兵器・鉄炮、不残被取上候由、誠ニ以仙藩ニ為人仁無之次第、　屋形様ニも如無かニ成セらる、誠ニ痛入たる有様成と申候、町中皆御大名他国之諸士之宿と成、店々も半分明開、半分戸さし、無異儀用之分計取引也、御手前御家中上下在、密々山通

之道通用官軍ニ不逢様ニと如此、　何分米穀を不足ニ致、兵器を取上、手出不成様ニと之謀計と相見得候、禿ニ成歟、追々如何、歎ヶ敷国と相成、此上ハ百姓前如何、

一九條様之御三方も、秋田より仙表へ御入、廿二日か一ノ関、東山へ五百人駕人割合来ル

月日之無之書付来ル写

此度

四條様　御入固ニ付キ、　宮様御披被成候ニ付、
何事も不分り　　伊達領御預リ
此字国とも言写書違か

一二本松　書違可成か　本領安堵　一棚倉　同断
一福島　右同断　一泉　右同断
一湯長谷　同　一守山　同
一津軽　同　一山形　同
一上ノ山　同　一天童　同

一岩城　同　一会津　本城被召上候事
一説ニハ半地と在

一米沢　本城被召上候事

一新庄　同断　一相馬　右同断

一佐竹　同断　一三春　半地被召上候

一庄内　未タ不知候　一白川城　仙台江御預リ

一南部　十万石ノ御加増　此御加増何之為か不分リ

一仙台　伊達・信夫之外ニ四拾万石之御加増
右者落城人神妙之取扱候ニ付如斯

一御曽子様（司）　奥羽吟味役

一屋形様弐ヶ国
御太守役被仰附候事

右之書付、月日無之事ハ委く候得共、御落去ニハ些早シ、床敷書付なり、（不分リ　御免無之候者不実か）

右十月廿九日拝見写取、

外江参候書付と少々違、唱（噂）サ書可成、未四条様も大丞官も御滞留成ニ、京より之勅旨ニ無之候而ハ、虚説書と外不思候、

一御上之大小之鉄炮、先ニ百駄程為登ニ相成、跡ニも被相登分在之由、御家中分千石ニ付鉄炮十挺宛指出、為登候様御首尾合ニ付、御一門様始、何損シ物、不用立様之物被相出候由なり、

一屋形様始、奥羽両国并関東方御大名様方、江戸表へ出府致候様被仰渡、皆様御登ニハ為成候由也、　江戸表之名、別ニ御改名相成、東京とか申候、未タ聢と不知、

□ノ関様ハ、過ル廿八日仙府へ御登被遊由聞、屋形様并若殿様ハ、左京太夫と被仰由、御両所様廿八日御出立、御小勢ニ而御登と言、若殿様ハ三日御立と申候、京都方之御滞留ニハ、殿様御登も難計、聢と不知、

四条様并京方共ニ皆御登也、

右之通書付ニ而も、噂さニ而も、色々之説在之、不定候、

東山江被相下候落人諸士方、御主人よりか、御上よりか、御呼出ニ成、一昨日之頃より段々登ニ成、当地之御方ハ、越後長岡人三十六人之内、昨日五・六人出立ス、此間之書ニハ不見候得共、本国御免ニ相成、御帰り之由相聞得候、此御方ハ御主人様より米拾俵、金拾両被下候との事相咄候由也、殿様御本国ニ御入相成候得者、御城并御城下町家共普請ニ相成、町家百姓江も右之通金・

米被下候由、全体御金持ニ而廿万両、御立抜之節、堀中へ入かクシ被置候由、
右ニ而再建被成候との事也、
一前ニ印通、屋形様并四條様、京方一ウ御立払、御登被遊候所、御道中白川口
向へ脱走と申、国々の浪士数万人カタマリ居、妨往来難成、仍而殿様方皆御
帰り被遊候由申候、是ハ江戸勢多、仙台様為登不申様との事也と申候、
右ハ戯言也、皆様無滞江戸迄御登、御大名様御一統、うそ咄多シ、

十一月十五日冬至中暖気也、尤上日和、昼ニ成風起る、朝ニ霜、冬日照、天気
続か如何、併過ル十日頃ノ雨雪、山々ハ相応之雪積る由也、其後三日曇り、

一薄衣納米直段、壱俵代拾四貫弐百文と申、段々納下直也、金不足、銭ニ而直
段立候由也、銭ニ而ハ金直シ、金六切より弐百文返リ金歩ニ八升位之物見へる、
此節ハ金ニ而買入候得者、米も安し、高直成物者木綿類、並手拭五百文より
上五百七八拾文と申候、太物類ハ始終利分と成、糸綿も高直ニ而も大ニ売候、
一糸買客人も、漸々三箇計り買入、当地十一日ニ出立候へ共、諸首尾合何角と延、
日形滞留ニ而十四日ニ出立、平治も同様、扨々つまらぬ都合ニ而、当分損ニ相

千草切尺弐百
五拾文中也

成候、何角乱也、

一先達より西岩井山ノ目より奥方百姓前壱騎(一揆)起る、御城下表未他国士ひ残リ滞留在、屋形様ハ来月御下りニ被為成候由、

一米、当時問屋ニ而八升より五合、然ニ御相場見合之節故ニ、書上ハ九升也、

㋓検断弥市も、十月より仮肝入被仰付、先役仲左衛門殿被相止、

一他国之落士あら〳〵登、当時之長岡士未タ廿人も残る、鍋島勢・薩州士ハ至而荒く、不宜、広島も同、熊本人宜、

一過ル十七日より寒気進、小雪折々、十九日昨夜より大ニ寒シ、寒気相応ニ相成候得共、雪里ニ無之、山々ニハ多く在之、其後さら〳〵小雪計り、朝夕寒気也、何分寒気も緩く、照勝ニ而、寒中不相応也、依而廿一日、御上より被仰渡、気候直シ御祈祷并ニ武運長久之御為、村々精進、休息為致、鎮守々々江参詣致候様御触、右之通致候、

廿二日長岡御家中も惣払出立ニ成候事、此御方病人大体本服、疵も直ル、店ニ而薬ヲ詰而売、

一仙府より取上候鉄炮四千挺、火薬百箇、官軍持登り候所、宮様ハ白川ニ御滞

留ニ而、右品取上候事甚不宜、強勢強盗之所行成、右品差戻候様ニと在而、宮様之方へ御取押へニ成由、屋形様ハ水戸領（岩城浜）より御船ニ而御出府被遊、官軍未仙府ニ弐千人も居候由也、何様白川先々官軍居候物か、会津庄内之勢、并又米沢藩、両所へ手分を致、一所ニ成而奥口ヲ堅め候と言、

一仙台赤何組と言脱走之士、弐千弐三百人とか　角兵とか　并江戸御籏本之何組と言、一所ニ在而松前へ渡、城ヲ落、夫より津軽へ戻、同所を敗打、段々秋田より敗登候と言、軍不止、何レ此節此辺ハ静謐也、何ニ京都之御政事不宜候物と外不見得候、官軍引不上事、至而あしく、古之様仁義之軍ニ不在、乱妨ニ而、無御法、軍礼無之候、

一廿二日小寒ニ成、緩やか、さら〳〵小雪、廿四日曇りニ而、小雨ニ成、廿五日さら〳〵小雪、暖和ニ而風吹、

一大豆引上り、六貫五百文、七貫ニ也、

一塩当着（引）ニ而五貫五百文　此品も夏煮不足、

一濁酒者不相替、壱盃八拾文、
一糀壱升三百廿文、日形かへニ而弐百廿文、
仍　大違也

春中より九月中迄ハ、密方御役人無之所、此間又々被相廻候由也、江戸為御登候御買被成由也、

〆

一山ノ目大肝入大槻殿屋敷中、一騎(一揆)之大勢ニ打こわしニ成、但御用所并門江ハ手を付不申、其外一円こわされ候、先ニ大肝入衆より、仿(防カ)之為ニ制而、即死三人在之由、依而弥一騎之者手強ク、如此至候、一ノ関様より御向役被相出、御取押被成由也、大槻之所計不宜様ニ相聞へ候、追々御城下より御下向、又々一騎所々ニ催し在之由也、一ノ関様ニ而当分御預り、

一生糸買方も、先客人者止ニ而、小谷屋金物店ニ而買方、廿六日早朝ニ入着、買方相始め候所、其外ニも所々江来而買方ス、仍而直段セり上る、殊ニ天的組と申密商人、少々ツ、所々ニ買方、三百両迄上ル、何分御免広く、小谷屋買入より高直ニセり上候故、買方不成、尤売人ハ御上御借上之節、是外持合無御座候由申出候故、残糸売方広く不売、至而買方六ッ敷、手前客人買方休ニ買

留ニ至候、余り高直ニ而不引合也、かくし物ハ御役抜之売方故ニはり込、買方甚困、休ニ致候、存之外高直ニ致候、仙台ニハ異人共不居、横浜へ行、彼ノ地ニ而買方、伊達衆取引也、

一此間者寒気も相応ニ而、人々悦ひ申候、併存之外緩し、雪も弐・三寸之薄雪故、残り不申候、日中きへ不留候、去年、去々年よりハ冷も強し、

一晦日日和也　一此頃銭札にせ物多く来而通用致候所、本手を皆々不知上納相成候処、御蔵方より贋札之事被仰渡、本方遣人相尋られ、御吟味相成、摺沢中田屋多く持下り、専ら遣方、仍而御召捕と成、囚人大勢、大騒きと相成候、右札ハ夏中被相出候壱貫文之札ニ而、御城下御近在迄之通用ニ被仰渡置候品ニ而、御郡方へ御首尾合無之札也、

一小谷金物店番頭与吉殿、当着刻より不快ニ而、大病と成、大ゐニ煩ひ、折々ニ薬用、本復趣、互ニ大慶ス、仍而此間中大取込、大勢出入ス、

一山ノ目騒動ハ、大肝入大槻氏ハ御城下為召登られ、御城下より御向之御役々御下向成而如此、

一十二月四日夜、狼川原町大騒動、是も百姓壱騎也、検断肝入役付中、近村寄

合七百人已上、居家打こわされ、悉く家小屋打こわす、直々米谷方大肝入衆方へ押行、仍而高泉様并大内様御向役御出張、御防キ被成候得共、不叶、米谷へ行、又御郡方御代官御役々様御出張ニ而、其外佐沼御名代等止、嶺正寺へ被指置、肝入検断江壱騎共縄をかけ、引行、大勢ニ而

兵粮早速御首尾合ニ而、近辺より出、凡八百人程、七ヶ村之人数也、是又誠ニ近□大騒動也、

一御城下ハ当時静謐ニハ候得共、御郡々々所々騒動ニ而、御上ハ不静不成候、二日程ニ而、名々家元へ引取、

一当冬ハ、新暦被相留、不出候、

正月之門松之式立拵不致、内々之祝ひ計り仕候様御触出相成候由也、在々者所々の騒キ在之、外之祝ひ松ハ成間敷由、人々相咄候間、追々御上御触可有之候、

一月館（築館）町ニ敵打在之、打者ハ御城下者、敵ハ秋田之者、同所ニ而出合、町中ニ而名乗かけたり、既ニ支度と成所、付添人和談ヲ入、此世柄敵キ等多く可在、少待給と言内、敵逃去、追掛而、町ヲ出抜、両人ニ而取押へ、遁可申歟と、抜打ニ而一刀ニ首打落ス、遁之打様也と人々賞ス、尤白絹首桶等持参、首ヲ

竹ニ指而立、懐中より父ノ位拝(位牌)ヲ出シ、前ニ直し而、打首ヲ備而、一言ヲのべ拝ス、夫より役付へ申出る、町ニ而打候ハヽ、町内為騒セん、付之者一寸之謀計ニ而、町ヲ出而打候物ニ相見得候、本人と申セ共、誠ニ能打様也と、人々賞(ママ)翫ス、

一今七日、一両日曇り、今日雪ふり、大ニ寒シ、明日ハ大寒と成、結構也、八日九日、八日さら〳〵小雪、相応之寒気也、

一先達南部様ニも、江戸江御登り、併不常之事、科人之部ニ而、御囚人ト成、至而麁籠ニ而、御附之人聊、尚官軍御向役御目附等付、外弐・三挺、至而麁籠ニ而、又秋田・津軽人、南部之御城下ヲ警堅スト申候、如何成訳か不知候、

江戸表ハ京より先達　天子様御下向被遊、御滞留、為御馳走之か、町中より祭仕掛物等拵ひ、賑々敷シ而、入御上覧ニ、

但　天子様ハ冬中ニ御帰洛被遊候由と申候、

官軍者御暇被下、国々江被相返候由也、併大掾官ハ仙府ニ未滞留也と申候、

一大川筋并狼川原村より米谷辺、川通者稲水冠りニ而、実入無之故、稲不刈分、

此節かり取、厩江入、蹈草ニ成由也、多く之損亡、
一米相庭、佐沼ニ而九升と成、南之方ハ高直ニ成、当地ハ八升問屋直段、　気仙沼ニ而七升五合、不釣り合、
一大豆ハ当時大ニ上り、壱俵九貫より五百文、
鉄炮被相留候故、猪肉・きぢ等一向無之冬也、
肴類ハ高直、真黒鮪此間少々漁在、上る、
当節小銭不足、鉄大銭多く、仍而多くハ大せんニ而直段ヲ語る、牛房も高直、小百文也、十日朝者相応之寒サ、雪無之上日和也、冬日照ニ成、十四日迄日和続、

□当過ル六日頃か、上川筋四ヶ村百姓一騎発り、松川町迄推来り候ニ付、御代官様并御役之大肝入殿御出張ニ而御指留、大騒動、然ニ又狼川原村之騒動鎮り、又々黄海村并西口村五百人程起り立、是又大騒動ニ付、関田ノ肝入衆へ押寄、当村の御地頭様方并薄衣泉田様へ御頼、急之御出張御頼ニ而、御向御家老、其外御人数、町方よりも組抜衆中御加勢ニ出候、千厩迄押行之所、御代官様御役々も、上川騒ニ而御留主、諸方之事ニ而、人皆大騒動、然ニ奥山様方御人数、并泉田様方共ニ、千厩海道大塚ニ而軒々留り、御代官様抔ハ、歩ニ而千厩

迄走御帰り、其外御役人様・大肝入衆大ゐニ御難義、諸首尾合も、何も不行届様成、急御用成、

黄海一騎も、藤沢より新沼通り推来る由ニ而、当町ニ而も夫々心配致容子、聞抜候所、不廻ニ千厩へ行候由、誠ニ以其気諸方ニ在而、物騒ヶ敷事也、当時御□味中、追々如何□、

一当冬ハ御年貢御相場と言、未ニ不立、尤諸上納之御触無之、騒而暮様也、尚諸上納金高多ニ而、上納成兼候様子也、

一㊇検断弥市事も、十月より肝入役迄被仰付、此間ハ勤居候得共、元より不好、尤世ノ騒ヶ敷折故、先日病気相達、無理〳〵と引込退役ス、仍而及川弘平殿江被仰付、両役共々是又止、引込、肝入致者無之、古肝入与左衛門殿孫ノ時次・改武右衛門と成、能肝入也、

一小谷之糸買方、番頭も着刻より病気、弥大病之所、格別宜方ニ付、十七日程滞留、今十四日出立、馬ニ而狼川原泊りニ行、糸之直段弥々高直ニ而止、四・五駄買入為登、地方ハあら〳〵さつはりと売仕舞、商人追々望人相出、押而望取、壱箇金三百五拾両ニ而留程、望三百七十両迄、珍敷事、無而ならぬと申、望人ニ而如此、病人旁手前ニ而も大勢出入、騒候計りニ而、大ニ迷惑致、ろく

〳〵の銭も不成、つまらぬ事也、破談等之揉合ニ而、大ニ長引、損金成、
一百姓一騎、騒動も、此御郡之内并他郡ニ而も所々ニ起り、夫々と取鎮め、大事不致、尚御目附様并御小人目附廻村ニ而鎮めらる、
一気候ハ寒暖在れ共、相応之寒気ニ而間ニ合候得共、雪ちら〳〵計ニ而、厚雪一円無之、照込、十八日、十九日抔ハ大風、田畑共ニ水気不足ニ成、
一御相場之事、御郡ハ米六切、大豆三歩、御地頭様方弥張り米六切ニ大豆三切弐分、御郡方諸償高、壱貫文ニ代五拾五貫と申候、一ノ関様方徳田村ハ、壱貫文ニ同廿四貫文と申候、尚又御郡当村分高代ニ而、上納一寸ハ難納、徳田村抔ハ御役々より責付無之、納り次第と申候、併一同之納ニ相成候様金代共ニ心掛置可申由、肝入衆より御触、当御郡ニ而も一体御首尾ニハ相成候得共、矢張り御責付無之候、百姓前一統人気立居候故、思而御構無之候、納り次第之事、
一米穀相場、所々不同、此辺ハ上・中八・九升、
大豆ハ弥引上、八貫貫（文）位ニ進む、小麦も不足、拾貫文位、中奥古川辺ハ米九升ニ成、佐沼も同、
大豆伊達行買方之者、壱俵拾五貫より拾六貫迄買入候所、又望人来而拾七貫

ニ望、右商人より買取俵高弐百石売候、跡々如何、
御城下・石之巻共ニ、米ハ高シ、九升と申候、奥方より高直也、

一御上之事、誠ニ御大変也、
屋形様并若殿様共ニ、江戸表ニ而御蟄居長ク被為蒙仰、尤御屋敷者無之、寺抔へ被為入由、御領地ハ廿四万石ニ被仰渡候由、三ヶ壱ニ可成、御一門様并御家中御一統、右御割合ニ可相成御容子ニ而、御城下一統誠以痛入候次第ニ而、甚皆々歎き、無申計候、未表立御触と言事無之候得共、御城下より下向之者専ら相咄候、
一芭蕉之辻張紙在、屋形様御事、長御慎ミ中ニ仍而、諸市中見世張申間敷事、店々も兼而様賑々敷飾り申間敷、一統慎ミ居可申事、門松等立飾り申間敷、年礼相廻り申間敷、万一心得違、兼而様致候者ハ、急度御始末可相懸事也と在之候、仍而此節より店々半分程戸さし、簾たれ抔ニ而居由也、
仍而在々茂右同様之心得ニ相成、殊ニ所々之一騎・騒動ニ而ハ、御城下ハ如何、正月事成間敷と人々咄合居候、仍而内備之事、追々容子次第、

八万へり

然ニ余国ニ而も、南部様ハ拾弐万石と成せらる、

四万欠

一ノ関様ハ二万石と被為成、米沢上杉様拾壱万石、

庄内鶴岡酒井様拾［　　］奥羽御大名様皆小高□被相□由

［　　］秋田江ハ仙脱走、徳川家［　　］此節合戦之由也、

一徳川将軍様御□□十万石ニ而被相立候由之［　　］ハ追々可知候

色々〳〵在

一屋形様ニ御実子御両在、御中奥ノ御腹ニ可被為在也、御兄様ハ松　五郎由三郎と被相称、御次御当才松五郎と被仰由也、御両様共無御滞御盛長被遊候ハ、結構、伊達御家之御繁(カ)続なり、御年来ニ而之御子也、

御年四才

御兄由三郎様御名改ニ成

十二月廿二日節分ニ成、此間ハ寒気なり、

又江戸御状之写

別紙之通被仰渡候間、此段可相達候事、

十二月　　行政官

伊達慶邦

別紙写

松平容保追討ニ付、至重之　勅命ヲ奉シ、其後嫡子宗敦上京之節、重而御沙汰之趣在之、及出陣ニ候処、半途ニ而反覆、却而容保党與し、上杉刑憲（斉憲）と内、奥羽私盟魁首と為り、督府参謀ヲウチ討害シ、且暴威ヲ以、総督府ヲ拘留シ、屡王帥ニ抗衡、遂ニ天下之騒乱醸シ成シ、兇逆悖乱ヲ還候条、今般開城、伏罪ニ、及下雖共、天下之大典ニ於て、其罪難被指置、依之城地被召上、父子於東京ニ謹慎被仰付候事、［　　］

……（この間、一丁分脱落）……

内二ケ村不出

一北方拾七ケ村同日ニ起、是者大騒動キ、凡四・五千人程、村々之肝入宅打解キ、肝入江縄ヲカケ、十四ヶ村肝入皆縄付ニ致、家宅一円ニ蔵共ニ打こわし、家

材タンス・長持等、着類共ニ破り、大肝入衆中津山直三郎殿、是も同様、両家共ニ悉く打こわし、肝入中縄付ニ而、先ニ立推懸候、大原平賀様より御人数御向役并御郡方御役々様方御出張、大ニ御骨折、願之趣御取受、漸々廿六日ニ人数引取ニ成由、驚入候次第、古より無之在様、山ノ目ニも不劣次第、莚ノ旗惣人数手木ヲ持而寄たり、御上江恨ミ計ニ無、役付へ恨而、大庄屋様ヲ前方より之子細在由也、

右旁ニ而、一統正月之義式無之候、市々者尤商人ハ立候得共、商も無之、不盛、物々高直、

此間前後大ぬかり

廿八日市、此間廿五日、六日暖気、雨ふり、廿八日飯後より晴ニ成、日和、

一米　上七升五合　一糯　六升五合位

一大ツ　八・九貫　一そは　高直　拾貫文位

一小ツ　拾五貫　一升三百文

一千草木綿切尺テ三百文　一白地手拭六百文

一肴高直　一セうゆ　壱盃百八拾文

外色々難書尽候　胡麻油壱盃壱貫三百文位ニ当ルト申候、

一当新暦御売出無之候、伊達辺ニハ何方暦か有之由也、稀ニ来ると申候、如何成年ニも無之事、当暦なし、

一若殿様ニハ、右廿八日目出度御帰城　御入被遊候事、

屋形様ハ、東京ニ被為在候事、

但御上ニ者、六十弐万八千石之内、廿八万石ハ御安堵被遊候得共、残高之分三万両日とやら、金［　　］指上候由、被為蒙□□［　　］奥方御征伐ハ無之候、明［　　］敷世なり、誠之乱世也、